

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
人間の探求 基礎科目	心理学	心理学は、主としてヒトの意識とその表れとしての行動を考察する学問である。ここでは、概論として、動機づけ、認知、学習、性格、対人関係、発達などを広く扱う。それを通して、人間心理の理解を深める。	
	教育学	よりよく生きることのできる人間を育成することが教育と定義される。リハビリテーションにおいて、対象者がよりよく生きることは最大の目標であり、専門職としてその基本的知識は重要となる。ストレス対処やコミュニケーションについて、教育学的知見から学修する。具体的には、専門職としての生涯教育、自己教育、対象者へ伝える、対象者を動かすなど、臨床の場で活用できる基本的知識を学ぶ。	
	生命倫理	<p>(概要) 現代には人間の生命をめぐる多くの倫理的問題が生じている。これまで人の誕生と死は、自然の営みの一環として普遍的なものと考えられてきた。しかし、科学技術と医療技術の進歩とともにその様相は変化しており、医療や福祉に関わる専門職は、生と死を巡るイメージや倫理について改めて考え直す必要性に直面している。人間を対象とする研究や実務において、対象とする人間の尊厳を守り医療に携わる者としての基本的責務等を理解して、倫理観を身に付けることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(82 竹崎久美子／8回) 生命倫理の概念、生の始まりと関わる倫理問題、医療をめぐる生命倫理、生の終わりに関わる倫理問題について講義する。</p> <p>(83 渡辺 聡子／7回) 科学的医学の論理と倫理、インフォームド・コンセント、今後の医療と生命倫理について講義する。</p>	<p>オムニバス方式</p> <p>同時に授業を行う学生数：120人</p> <p>講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。</p>
	コミュニケーション論	家庭、学校、医療や福祉施設等の現場を含む地域社会において、日常的・非日常的に接触する人々と気持ちよく言語的・非言語的なコミュニケーションを通して、お互いに分かり合ったり思いやりをかけ合ったりして生活することが重要である。そのためには、自分の考えや意見を素直に表現してより良い人間関係を結ぶことのできる社会的なスキルであるコミュニケーション能力を習得する必要がある。対象とする人々を一人の人間として心から大切に、誠心誠意を持って対応することで、信頼関係を築く基礎を学修する。	
	社会学	社会学とは、人と人が関わりあうことで形作られ変化していく社会現象を読み解こうとする学問である。具体的には、家族といったミクロ的枠組みから、会社、地域、国家などのマクロ的枠組みまでを、その変遷や課題について学ぶ。また、高知県や市町村の抱える過疎問題や高齢者福祉、地域福祉の問題について理解を深める。限界集落、集落再生、住民参加の町づくりなど、地域社会の実情を踏まえて、高齢者・障害者の社会参加への糸口を学修する。	
リーダーシップ論	リーダーおよびリーダーシップは、会社組織だけでなく、友人の集まり、家族など様々な場面でみられる。リーダーシップとは、ある特定の人物が、所属する組織や集団の目標達成に向けメンバーたちに影響を及ぼす力をいう。ただし、リーダーシップを発揮できるかどうかは、組織における他のメンバーがその人物をリーダーとして認めているかに依存している。本授業は、リーダーシップに関する様々な知識やリーダーシップを实践する上での知見を学ぶ。	<p>同時に授業を行う学生数：150人</p> <p>講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。</p>	
国際関係論	世界政治のさまざまな要素について、叙述や、説明、理解、あるいは予測することなどを目的としている。国際関係の主要な出来事と学説について講義し、基礎的な事項を理解してもらおうことを目指す。現在の国際政治の仕組み（そのあらましと形成過程）、国際関係論の理論などの学説の理解、国際関係論の知見を用いて、現実世界の諸問題を分析できるようにすることを到達目標とする。	<p>同時に授業を行う学生数：70～80人</p> <p>講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域の探求	地域課題研究Ⅰ	研究の意義や目的を理解し、テーマの選択、調査研究の手順、文献検索、統計学を用いた分析方法、調査を実施するにあたっての倫理的配慮、量的研究や質的研究の手法、論文の構成や注意点、プレゼンテーションの方法についての基礎知識を学修する。本科目は「地域課題研究Ⅱ」に連動する科目でもあり、調査研究の基礎的手法や考え方の修得を目指すものである。	
	地域課題研究Ⅱ	地域社会が抱える様々な課題の現状について、調査やフィールドワーク等を通して知り、可能であればその解決のための方策までを考える。各グループでの地域課題(テーマ)の設定、インターネットや資料等による対象となる地域の概要調査、地域での実地調査や関係者からの聞き取り調査、それらに基づく地域課題の分析と結果のまとめ、レポート作成を含む発表準備、プレゼンテーションなどを行う。これらの学修を通して地域の特徴を踏まえ、課題や魅力を発見できるような基本的な知識・技能を身につけ、それら全体を整理して説明することができる能力を養う。	
基礎科目	生物学	人間の身体の構造と機構を学修するにあたり、医療職に必要な高度の生物学的知識をより理解することが必要となる。生物の生命現象について、細胞レベルから、刺激と反応、および動物の行動についての仕組みまでを学修する。具体的には、細胞の構成と働き、膜電位、興奮と伝導、反射、本能的行動、細胞死などを学ぶ。	
	数学	社会人として必要な数学の基礎的素養、および、数学の活用力を身につけることを基本とする。到達目標は、①数や演算に関する基礎事項を理解し、必要な計算ができるようにする。②「統計学」、「物理学」や専門科目を理解するための数学の基本を理解し、計算ができるようにする。③社会人として必要な論理的思考力・判断力を身につける。	
	物理学	リハビリテーション技術の習得のためには、物理学的な物の見方や考え方が専門科目への基礎となる。この科目では、物体の運動と力学、電磁波の性質、電気、音と光の振動の性質などについてその原理や法則、基本的な用語に関して学修する。	
	統計学	統計学の基本的な考え方と基礎的な手法を学ぶ。統計学を理解するために必要なデータの分布に関する知識について整理し、データが属しているグループ全体の特性の推測と、2グループ間の差を調べるために用いる検定の一般的な方法について学習する。	
	情報処理演習Ⅰ	情報化社会において、コンピュータの知識と操作技術の修得は、医療の現場でも必須となっている。本授業では、コンピュータおよびネットワークの仕組みを理解し、情報機器を利用したコミュニケーションのとり方の幅を広げる。また、レポートやドキュメントの作成方法、情報の整理方法、情報検索方法等について学修する。	共同
	情報処理演習Ⅱ	情報化社会において、コンピュータの知識と操作技術の修得は、医療の現場でも必須となっている。本授業では、コンピュータによる情報処理の仕組みを理解し、データ処理の基本と数値データ分析の基本的な方法を学ぶ。また、情報の適切な取り扱い方法を理解し、プレゼンテーションによる情報発信など、基礎知識を学ぶとともに、臨床や研究活動に活用できるよう学修する。	共同
	自然の探求		

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	健康の探求	健康科学	近年、生活水準の向上、余暇時間の増加に伴い健康づくり、体力づくりに対する社会的関心は大きな高まりをみせている。このような状況下でリハビリテーションの領域も治療から予防へと拡大してきており、地域住民の健康管理、健康指導に関わる機会も多くなってきている。健康の維持増進のためには運動・栄養・休養の三要素をバランスよく保つことが重要であるとされている。主に健康と運動についての理解を深めるとともに、体力測定を通して、健康や体力の知識を学修する。
		健康とスポーツ	全人的な人間形成に必要な身体運動に関する科学的な知識と、筋・心肺機能についての特性を理解し、それぞれの機能の維持や向上を図るための基本的な知識を身につけ、各種のスポーツ実技を行う。加えてチームスポーツを通してコミュニケーション能力も養う。
	外国語の探求	英語 I	異文化や、多様な価値観を理解する上で、重要なコミュニケーションの道具としての「英語」に慣れ親しみ、主体的、積極的に英語の学習に取り組み、広く世界を知る喜びを得ることを目標とする。高校までで修得した基礎英語を踏まえ、基本的な英文を読む能力と書く能力を学修する。英文読解能力を高めることで、英語文献を理解する基礎をつくる。
		英語 II	近年医療現場においては、外国人が対象となる機会が増えている。医療職として英語による情報を正確かつ効果的に入手し、理解し、英語の文章で自分の考えや事実が表現できるように基礎的な力を養って行く。特に、英語の音声を聞き取ったり、情報内容が正確につかめるようリスニングについても学修する。
		英会話	国際化が進む我が国において、多くの外国人が仕事や観光などで滞在するようになり、外国人との交流が日常になってきている。相手の考えを正確に理解できること、英語による会話で伝えたいことを正確に表現し、自分の考えを正確に相手に伝えられることを目標とする。日常生活において、幅広く外国人と交流できるように、英単語の理解、語彙力、外国の文化や社会の理解などを学修する。
		中国語	隣国である中国とは、経済・文化・人事交流など、アジア圏の中でも交流の盛んな状況にある。中国語の初級文型を学び、実際にコミュニケーションができるよう、聞く、話す、書く、読むという四技能をロールプレイを通して効率的に学修する。具体的には、中国の音と文字に触れ、中国語式和訳や日常会話、音読、文法本文音読など、基礎的な発音、文法の習得を踏まえて、聞く、話す練習を繰り返し学修する。
職業専門科目	専門支持科目 基礎医学	医学英語	医学英語の理解とその必要性は昨今のグローバル社会では通訳者、翻訳者だけではなく、幅広い分野で必要とされつつあり、とくに医療従事者の基礎知識として必要とされるものへと変化してきている。医学誌・ウェブサイトでの情報収集、論文の執筆、国際学会での発表などにおいて不可欠である医学英語について学修する。
		解剖学 I (総論・神経系)	医療に携わる専門職に就く者として、人体の生体の正常な構造を正しく理解することは必須である。系統解剖学の立場から、中枢神経、末梢神経、感覚器について学習する。中枢神経系は脳と脊髄から構成され、外界からの情報を受容し、その情報を処理、統合して行動、情動、思考、記憶など高度な指令を出す重要な部分である。これらの形態と構造に関わる基礎的知識を習得する。末梢神経では、感覚器により得られた外界の情報を中枢神経に送り、中枢神経系からの出力情報を末梢効果器に伝える神経系について学習する。さらに運動神経系、感覚神経系、自律神経系の機能と形態との関連性について習得する。併せて解剖学用語などの医学用語を修得する。

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門支持科目 基礎医学	解剖学Ⅱ (内臓・脈管系)	内臓系と脈管系を中心に人体の正常構造について系統解剖学の立場から基本的な概念と知識の習得を目指す。臨床系専門科目に先駆けて、心臓血管系、リンパ系、消化器系、呼吸器系、泌尿生殖器系、内分泌系など多岐におよぶ学習範囲を系統立てて学習する。単なる名称の記憶にとどまらず、形態と機能との関わりを考え、医療に携わる者として基盤となる知識や論理性のある思考能力を身につける。	
	解剖学Ⅲ (骨格系)	人体の基礎を構成し、運動器系の重要な器官である骨について分類・構造・発生などの総論と、それぞれの骨の部位や形態・特徴などを学習する。解剖学的用語を理解する模型を用いてそれが何骨で、特徴的な部位を指し、名称・付属するものを答えることができる。何骨と何骨が接し、何関節を構成しているかを理解する。関節の形態や動きによる分類ができる筋の解剖学的用語を理解する骨の基本的構造を知る。	
	解剖学Ⅳ (筋系)	医療に携わる専門職に就く者として、人体の生体の正常な構造を正しく理解することは必須である。この科目では、筋ならびに筋を支配する神経についての構造と役割・特性について知り、人体の構造を立体的に捉え、関節と運動の仕組みについて学修する。具体的には、肩関節・肘関節、手関節、手指の関節、股関節、膝関節、足関節、体幹(頸椎・胸椎・腰椎・仙椎)に関与する筋、神経について、名称とその概要について学ぶ。	
	生理学Ⅰ (動物性機能)	人が環境に適応して活動する上で働く神経系の機能、すなわち動物的生理機能について、運動機能、感覚機能、高次脳機能などを通して学修する。主な学修内容としては「神経系の構成」「運動単位」「脊髄反射」「脳幹」「小脳」「大脳基底核」「大脳運動性皮質」「大脳連合野」「感覚器と感覚の種類」「体性感覚」「聴覚・平衡感覚」「視覚」「味覚・嗅覚」「自律神経系」である。これらの学修を通して、人の感覚・運動機能や高次脳機能の神経メカニズムについて理解を深める。	
	生理学Ⅱ (植物性機能)	人体の生命維持に関わる生理機能の仕組み、すなわち植物的生理機能について、細胞の働きから各臓器の機能を通して学修する。主な学修内容としては「細胞の生理機能」「内部環境とホメオスターシス」「体液の恒常性」「血液の機能」「循環機能」「呼吸機能」「消化・吸収機能」「腎臓と排泄機能」「内分泌機能」「代謝と体温」「老化と生理学」である。これらの学修を通して、医療人として必要とされる生命活動やその維持機能に関して科学的視点から学習を行う。	
	運動生理学	運動生理学とは、身体運動によってヒトの生理機能にどのような変化が生じるのか、その現象と仕組みについて理解する学問である。解剖学や生理学を基礎として、運動時における身体機能の変化やトレーニングによる適応性について学習することで、医療現場や健康増進活動、スポーツ現場において必要とされる運動生理学の基礎知識を身につける。	
	運動生理学実習	運動を行うと、心拍数の増加、呼吸機能の亢進、また体温の上昇といった現象が見られるように、運動と器官系の機能は密接に関連している。運動生理学で学習した呼吸、循環、筋活動等の生理現象を実際に把握するため、運動中の人体の生理学的応答を測定する実習を行う。運動によって起こる身体機能の一時的変化や適応現象を観察し、データの収集、処理および考察をすすめる。具体的には、生理学のための弱電(呼吸数、心拍数、血圧、体温、皮膚温の測定)、運動時心拍数の測定、心電図の測定などである。	共同
	基礎運動学	人間が運動する場合、筋・骨格系のみならず人間の正常な身体運動の発生機序と、それに関わる身体構造と機能の関係を学修する。具体的には、運動の成り立ち、力学の基礎、人体と重心、支持基底面と重心線との関係、全身の重心と分節構造、角加速度と慣性モーメント姿勢とその制御などで、てこの種類と人体での作用の例、てこの力学的有利性、身体重心と安定性について学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要					
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
職業専門科目	基礎医学	運動機能学実習	身体を構成する各関節について、正常な基本動作の関節運動メカニズムと動作特性について学修する。具体的には、関節運動の基礎、股関節、膝関節、足関節、脊椎、肩関節、肘関節の運動法則と運動のメカニズムについて学修する。本講義は、身体障害領域における評価・治療の基本となる知識を学ぶ。		
		理学療法運動学演習	人間が動作するには、動作に必要な関節可動域、筋収縮、重心位置と支持基底面の関係を適切に保つバランス、動作学習の要素が必要である。授業では、動作と関節可動域、筋収縮、バランス、動作学習の関係について学ぶ。そして、起居動作や歩行・階段動作の観察、分析から、これらの動作に必要な関節可動域、筋収縮、バランスが理解できるように学修していく。	共同	
		作業療法運動学演習	人が作業をする場合に必要となる運動制御と身体運動についてと、日常生活上の各種動作における運動学的分析について学修する。具体的には、運動神経回路の働きと各動作における運動コントロールを理解していく。また、日常生活の各種動作における手や上肢機能、姿勢、歩行などの移動について分析することで、身体障害領域における評価・治療の基本となる知識を学ぶ。	共同	
		人間発達学	生命が誕生するしくみと生まれるまでの各組織の発生、さらに乳幼児から小児期・少年期までの運動と認知機能および情意面の発達の違いやその特徴について学習する。これらの学習を通じて、人間が発達するために多くの支援や環境が必要であることの理解を深める。また、成人期・老年期そして死に至るまでの量的・質的变化（老化）の過程について、発達という観点から生理機能、運動機能および認知機能について考究し理解を深める。それぞれの時期に特徴的に出現する病気や障害について、人間のライフサイクルという視点に立って理解する。		
	臨床医学	医学概論	臨床医学におけるその基本的考え方と基礎を理解し、医療人としての見識を学修する。具体的には、医学及び医療の歴史、感染症とその対策、生命倫理移植医療、インフォームド・コンセントなど再生医療、生命倫理、病気の診断と治療、リハビリテーションの役割、予防医学、生活習慣病の原因と予防法、平均寿命と健康寿命、老化と死などについて学ぶ。		
		病理学	病気の原因、発生機序の解明や病気の診断を確定するのを目的とする学問であり、疾病の原因、経過および結果など、疾病の成り立ちについて学修する。具体的には、病理学理論、各種疾病の病態の概要、代謝異常、退行性病変、進行病変（増殖と修復）、循環障害、炎症と免疫、感染症、腫瘍、放射線障害、老化、先天的異常および各種疾患について学ぶ。		
		内科学	内科学の概念、おもな症状、臨床検査、治療法、主要な内科疾患などを理解する。内科疾患から起こる障害に対するリハビリテーションを実施する際の基礎知識をつけ、実践の場で役立てられることを目的とする。		
		整形外科学	運動器疾患の構造と機能を理解し、整形外科的診断、治療法を理解する。骨折、脱臼、および神経、関節、脊椎、上肢、下肢の外傷、先天異常、骨軟部腫瘍、感染症、骨系統疾患、筋疾患、各関節脊椎の慢性・変性疾患について解説し、そこから生じる障害について学ぶ。		

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業 専門 科目	臨床 医学 専門 支持 科目	臨床神経学	神経内科で取り扱う疾患の基本的知識を理解し、それに伴う神経症状について学修する。具体的には、神経内科総論、神経解剖学、神経心理学、神経診察、神経学的検査（MR I・核医学）、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血、パーキンソン病、認知症、脊髄小脳変性症、多系統萎縮症、筋委縮性側索硬化症、多発性硬化症、ギラン・バレー症候群、重症筋無力症、筋ジストロフィーなどである。
		精神医学	精神医学で取り扱う疾患の領域について、正しい知識を身につけ精神疾患に対する理解を深めるとともに、精神障害の成因と分類、精神機能の障害と精神症状、感情欲動および意志自我とその障害などについて学修する。具体的には、統合失調症およびその関連障害、気分（感情）障害、精神作用物質による精神および行動の障害、神経症性障害、てんかん、生理的障害および身体的要因に関連した障害、成人のパーソナリティ・行動・性の障害、精神遅滞[知的障害]、心理的発達障害、認知症とその特徴大脳皮質の変性疾患などである。また、精神障害の治療とリハビリテーション、精神科の保健医療と福祉、およびメンタルヘルスについても学ぶ。
		小児科学	成長、発達段階にある小児の特性をふまえ、主にリハビリテーションに関連した小児疾患についての成因と症状などについて学修する。具体的には、小児科学概論、神経発達と乳幼児の行動、発達栄養と摂食、小児保健、小児の一時救命、新生児・未熟児疾患、先天異常と遺伝病、循環器疾患、感染症、消化器疾患、内分泌疾患、血液疾患、免疫・アレルギー疾患、膠原病、習癖、心身症、腎疾患、神経骨系統疾患、重症心身障害児などである。
		リハビリテーション医学	リハビリテーション医学は実践的臨床医学の一つであり、各種の幅広い疾患と様々な障害に対して急性期より介入するものである。その介入手段は多岐にわたる。このためリハビリテーション医学の診断、検査、評価、治療の進め方と同時に、リハビリ医療は「急性期からリスクを管理しながら行う」ことの重要性を理解することを授業の目標とする。到達目標は、各疾患の評価とリハビリテーションの進め方の基本について学ぶ。
		臨床心理学	病院の患者や施設などの入居者の心理を系統的に学び、各々のケースの心理状態を客観的に把握することで、患者や入居者の心理を理解するための知識を習得する。
		耳鼻咽喉科学	ヒトをヒト以外の動物から区別する機能の一つに言語機能がある。ヒトの成長過程における言語機能の獲得は、聴覚による理解から始まり、つづいて発語（喉頭における発声に基づく）、最後に文字言語の使用へと進められる。耳鼻咽喉科学は言語理解の最も重要な聴覚機能、音声言語機能の障害をきたす種々の疾患を扱う学問である。本科目においては、言語聴覚士として最低限必要とされる耳鼻咽喉科領域の疾患に関する診断や治療といった知識を身につけ、理解を深める。
		形成外科学	生まれつき、あるいは病気や怪我で失われたり損なわれたりした身体の表面的異常を、主に手術という手段を用いて正常な形に近づける治療を行う医療分野について、主に口腔周辺の唇裂・口蓋裂を中心に、原因や治療法、また、言語聴覚士の役割について学ぶ。
		臨床歯科医学	80歳までに自分の歯を20本残す8020運動のように、人の健康において、歯はとても重要なものである。歯科医学の基礎および臨床的知識を学び口腔機能について理解を深めてもらう。口腔は消化器の一部であり、また、摂食、嚥下、発音に関する重要な器官である。口腔内だけでなく、顔面や頸部の発育や構造、機能、特性を十分に認識し、種々の疾患についての理解を深め、機能障害の診断や治療を学ぶことによって、口腔機能障害の予防と回復に役立てるようにする。

授 業 科 目 の 概 要				
（リハビリテーション学部リハビリテーション学科）				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
	臨床医学	画像診断学	各種撮像法の基本原理と画像診断の理論について学修し、リハビリテーション専門職が扱う代表的疾患の画像に関する知識を学ぶ。具体的には、CT、MRI、超音波画像、単純写真などの正常画像を把握する。	
		臨床栄養学	社会の変化は食生活を豊かにした一方、生活習慣病の増加など様々な問題を引き起こしている。食事は単に栄養素を摂取することだけでなく、心身の順調な発育・発達や成熟を促し、健康な生活を営むための基礎である。この科目では、栄養学の基本となるエネルギーや栄養素、食品の非栄養成分などを学修し、病気の原因や治療に関して理解を深める。	
		臨床薬理学	生体内における医薬品の標的である受容体や酵素といった様々な機能性分子と、化学物質である医薬品との相互作用を明らかにすることで医薬品の薬理作用機序を解明することができる。この科目では、薬理学の基本的な考え方を学修し、種々な薬物の薬理作用や有害事象についても学ぶ。	
		救急管理実習	医療職として、病気やけが、災害などの緊急時に、自分自身を守り、けが人や急病人を正しく救助し、医師や救急隊に引き継ぐことは重要な役割である。この科目では、救命手当・応急手当に関する知識と技術を学修し、心肺蘇生、AEDの使用法、気道異物除去などについて学ぶ。	
職業専門科目	専門支持科目	リハビリテーション概論	リハビリテーションの理念・定義を正しく理解し、リハビリテーションの専門職としての基本的知識について学修する。具体的には、リハビリテーションの対象と範囲、国際生活機能分類（ICF）、リハビリテーションの流れ、リハビリテーションにおけるチームアプローチなどである。	
		社会福祉概論	社会福祉は福祉を実現するための方法であり、理想と現実の間にある個々の生活における隔たりを解消・軽減するためには、社会的努力が求められる。社会福祉では、制度やサービスを役立つ形にするための援助を行う。これらの社会福祉に関する概要と、リハビリテーション専門職との協働等について学修する。具体的には、我が国の社会保障制度の概要と変遷、社会保障を取り巻く環境、社会福祉の基礎、公的扶助、などについてである。	
		地域包括ケア論	（概要）高齢者や障害者が、地域において自らが望む生活を送るためには、さまざまな複合的な課題に対してアプローチを行うことが必要となる。生活の目標とそのため課題解決に至る道筋と方向を明らかにし、地域にある資源を活用し、総合的かつ効率的に課題解決を図っていくプロセスとアプローチについて学修する。具体的には、個別のニーズを明らかにするアセスメントから、ニーズに対するフォーマル・インフォーマルサービスの概要と、チームアプローチに必要な保健・医療・福祉の連携のあり方について学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （120 森下 幸子／8回） 生活の目標とそのため課題解決に至る道筋と方向を明らかにし、地域にある資源を活用し、総合的かつ効率的に課題解決を図っていくための個別のニーズを明らかにするアセスメントについて学ぶ。 （119 川上 理子／7回） ニーズに対するフォーマル・インフォーマルサービスの概要と、チームアプローチに必要な保健・医療・福祉の連携のあり方と実際について学ぶ。	オムニバス形式 同時に授業を行う学生数：150人 講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。
		チーム連携論	医学的な視点のみならず、対象者の心理的・社会的な視点にも配慮した医療が求められる中でチーム医療は必須の手段である。より良いサービスを実践するための多専門職種との有機的な連携と協業について学修する。具体的には、専門職種間の有機的な連携と協業についての基礎知識や理論、連携のためのマネジメントの実際、多職種連携が果たす役割や機能について学ぶ。	同時に授業を行う学生数：150人 講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目 専門基幹科目(理学療法学専攻)	基礎理学療法学	理学療法概論	理学療法の定義および概念を踏まえ、理学療法士として必要な基本的知識や技術について学修する。具体的には、理学療法の定義、医療における位置づけ、業務内容、学問的体系、さらには今後の職域の可能性について論じ、将来、理学療法士となるための動機づけを行うとともに理学療法に関する基本的な知識について学修する。本講義は最初の理学療法専門科目であり、理学療法に対する意欲、興味関心、基礎的価値観を養う。	
		理学療法概論演習	理学療法の対象となる人が、自身の望む生活活動ができるようになるための援助方法と基本的態度について学修する。具体的には、障がい者の模擬体験を通して障害の特性を理解し、国際生活機能分類に基づいてニーズの焦点化や目標設定、プランニングなどを学び、他職種とのチーム医療について多角的な見地から議論を深め、医療・保健・福祉における理学療法の位置づけについて理解を深めるとともに、理学療法士としての基本的態度について学ぶ。	共同
		理学療法セミナーⅠ(PBL)	全人間的復権を目指して行われているリハビリテーション医療の中で、理学療法士が担っている役割および今後期待されている事柄を理解する。特に理学療法を行う上で重要となる運動・動作に関する基礎科学について、グループワークを通してお互いに理解出来るように学びを共有する。また、理解できない語句や内容について文献検索し、自ら調べ理解する姿勢(基礎的課題解決能力)を身につけ、今後の学修へとつなげることを目標とする。	共同
		理学療法セミナーⅡ(PBL)	社会人としての基本的態度を身につけるとともに、理学療法の対象者への接し方について学修する。礼儀正しい態度や言葉遣いを修得するとともに、治療者として必要なコミュニケーション能力についての知識を得て、演習を中心とした技術学修を行う。具体的には、コミュニケーションの実際として、聞き取りやすい発音と話し方、身だしなみと態度・表情、報告・連絡・相談など、臨床場面を想定した技能について学修する。	共同
		臨床運動学	基礎運動学や運動学演習で学んだ正常な身体運動の基礎知識と分析技術をもとに、主に支持基底面と重心、各関節の動き、各関節に作用する外力と内力による関節モーメント、筋による制御などの観点から正常な身体運動がどのようなメカニズムで成り立っているのかを理解する。そのうえで、主な関節の関節可動域制限や筋力低下による動作障害の基本的な機序を学び、症例の基本動作を運動学的に分析し、問題点の抽出と治療計画に応用可能となることを目標とする。対象とする動作として、端座位・立位姿勢、椅子からの立ち上がり動作、平地歩行等について分析方法を学修する。	
		理学療法管理学	医療・福祉の現場で理学療法を行う上で必要となる理学療法士としての倫理と管理・運営について学修する。具体的には、患者のリスク管理、リスクマネジメントにおける記録・報告の方法、感染の基礎と予防の実態、職場運営管理、機材管理、緊急時対応について学修する。	
		理学療法評価学	理学療法を実施するにあたって必要となる対象者の基礎的な情報の種類とその収集方法について学修する。具体的には、医学記録の判読と観察、代表的な検査測定法と適応・意義、面接によって対象者の全体像をいかにとらえるかについて、一部演習を交えながら学修を進める。また、バイタルサインから対象者の全身状態を把握することの意義と方法についても学修する。	
		理学療法測定実習Ⅰ	各種運動障害の評価に共通した基本的評価法である形態測定、関節可動域測定を中心にそれらの理論と実際について学修する。各測定の方法、適応、意義などを講義したのち、学生同士でペアとなって実習を行う。実習では、身体部位の固定法、機器の使用法と起こりやすい間違い、代償動作等について学修する。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目 専門基幹科目(理学療法学専攻)	理学療法評価学	理学療法に関わる主要な評価項目の手技(技術)および記録法について学修する。具体的には、反射・反応検査、知覚検査、疼痛検査などの検査・測定の目的と方法について学修する。本講義では学生同士でペアとなって実習を行い、健常者の多様性についても学修する。	共同	
		理学療法に関わる主要な評価項目の手技(技術)および記録法について学修する。具体的には、筋触診、筋力検査などの検査の目的と方法について学修する。本講義では学生同士でペアとなって実習を行い、健常者の多様性についても学修する。	共同	
		理学療法に関わる主要な評価項目の手技(技術)および記録法について学修する。具体的には、筋トヌス検査、運動協調性検査、脳神経検査、高次脳機能検査などの検査の目的と方法を学ぶ。本講義では学生同士でペアとなって実習を行い、健常者の多様性についても学修する。	共同	
		心電図・筋電図・脳波を学ぶ上での基礎知識および方法について学修する。具体的には、心電図では生体の電気現象の特性と測定法、循環器概論、心電図の意義と各誘導方法、心電図に必要な生理解剖、心電曲線の診かたと分析方法、心電図を用いたリスク管理など、筋電図については、筋電図の基礎知識、筋電図の診かたと分析方法など、脳波は脳波記録方法、脳波の分類とみかたなどについて学修する。		
	理学療法治療学	運動療法学	運動療法学は、理学療法の中において大きな柱として位置づけられており、解剖学、運動学、生理学などの専門基礎知識を背景に、理学療法士が得意とする分野である。本講義では、基本的な運動療法を適切に行うための知識と技術について学修する。総論として、運動療法の定義、対象、理論、種類、機器について学び、各論として、基本的な各種運動療法(関節可動域運動、筋力増強運動、持久力増強運動、協調性運動、その他の領域の運動療法)について学修する。	
		運動療法学実習	理学療法の対象疾患は多岐に渡り、それらに対する運動療法も他種多様である。しかし、系統だった一連の運動療法は、個々の基本的な運動療法手技の延長上にある。そこで、運動療法学で学修した運動療法の中で、特に基本的なものについて実習を行う。具体的には、人への触れかた、四肢の把持のしかた、体の支えかたに始まり、徐々に人の体を操作する内容へ進んでいく。その結果として、関節可動域運動やストレッチング、基本動作練習へと繋げて学修する。	
		物理療法学	物理療法は、水、温熱、光線、電気などの物理的手段を用いた治療手技であり、患部の疼痛や循環障害を改善することを目的としている。本講義では、これらの作用機序と適応・禁忌について論じた後、各々の治療器具の特性と操作方法について学修する。各種の物理療法を実施するために、物理療法と関連する物理学および生理学的事項を理解し、物理療法が生体に及ぼす作用、適応と禁忌、リスク管理の知識についても学修する。	
		物理療法学実習	物理療法機器の実際の操作方法および使用方法について学修する。特に温度や出力の適正値の設定や禁忌事項の遵守といった安全性の確認に重点をおいて実習を通じて身に付ける。具体的には、温熱療法・寒冷療法・水治療法・光線療法・電気・電磁波療法・牽引療法・超音波療法について機器を用いて実習する。さらに症状に適した物理療法の処方とリスク管理について学修する。	共同

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目(理学療法専攻)	理学療法日常生活活動学	日常生活で基本として行われる食事、排泄、更衣、移動などの代表的な動作(日常生活活動:ADL)を取り上げ、それらの動作の分析・評価方法と障害を有する対象者のトランスファーや歩行補助器の使用など生活自立を目指した指導方法について学修する。また、生活の質についての基本的な考え方についても学修する。	
	理学療法日常生活活動学実習	起居動作や移乗・移動動作などを実際に行うことによって、動作障害に対するADL動作指導や介助法指導の要点について学修する。日常生活活動学で学んだ生活基本動作の分析・評価および指導方法について実習を通して学修する。本授業を通じて、介助者、被介助者、様々な生活環境を推測でき、適切な動作を選択、指導ができるように学修する。	共同
	内部障害理学療法実習	(概要)内部障害(循環機能障害、呼吸機能障害、腎機能障害、代謝障害など)の定義や特徴について正しく理解し、内部障害の原因疾患の理解と内部障害に対する理学療法の理論を習得し、臨床応用できる知識を系統的に学修するために、理学療法士が行うことのできる内部障害の評価、運動療法、生活指導、リスク管理の具体的な方法について学修する。 (オムニバス方式/全30回) (3)山崎 裕司/12回 循環器疾患(虚血性心疾患、心不全、末梢動脈閉塞性疾患、一部腎臓疾患を含む)に関する病態の理解、理学療法評価の選択、障害の重症度に応じた理学療法、生活指導、リスク管理などについて学修する。 (10)宮川 哲夫・(13)片山 訓博/18回(共同) 呼吸器疾患の定義や分類および呼吸理学療法について知識を習得し、その実技指導を通じそれぞれの技術や特徴、リスク管理について学修する。また、代謝疾患(一部腎臓疾患や糖尿病)に関する病態の理解、理学療法評価の選択、障害の重症度に応じた理学療法、生活指導、リスク管理などについて学修する。	オムニバス方式・共同(一部)
	中枢神経障害理学療法実習	脳血管障害による中枢神経性の片麻痺や小脳性運動失調症、協調運動障害などの病態を理解し、それらの評価法と運動療法の考え方について学修する。具体的には脳血管障害患者・パーキンソン病患者・脊髄小脳変性症患者等に対する評価・予後予測・理学療法の実践について学修する。	
	脊髄障害理学療法実習	脊髄障害に関する理学療法治療理論、技術の基本的知識について学修する。具体的には、脊髄損傷の病態像と機能障害の関係、回復過程および予後に関する知識、合併症、理学療法評価における障害の捉え方、病期に対応した理学療法の実践手順について学修する。さらに、脊髄障害に対する必要な基本的理学療法技術や各種指導方法についても実技を踏まえ学修する。	
	運動器障害理学療法実習	理学療法士が運動器疾患を有する患者に接する機会が多い。筋肉・骨・関節構成体などの運動器の障害に対する理学療法の考え方・進め方について学修する。主として骨折、靭帯損傷、各関節の痛みあるいは変形など整形外科疾患により生じる機能障害、ADL・QOLの低下を理解し、それに対する理学療法評価と理学療法の進め方や、予防・再発予防について学修する。	共同
	発達障害理学療法実習	運動発達障害を呈する小児疾患の中の中枢神経疾患である脳性麻痺の障害とその特徴について学修するとともに、その障害の捉え方と評価、運動療法についての知識を学修する。また、脳性麻痺の異常運動発達を理解するために必要な姿勢反射と正常運動発達について学修する。さらに、脳性麻痺以外の運動発達障害を呈する小児疾患についても学修する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目 専門基幹科目(理学療法専攻)	理学療法治療学	老年期障害理学療法実習	高齢者の加齢に伴う心身機能の変化、高齢期に特有の疾患や症状等についての理解をもとに、高齢期障害の対象者の身体・認知・精神機能における適切な評価方法および疾患に応じて評価を選択する方法について学修する。高齢者では心身機能面での評価だけでなく、生活の質(QOL)をさらに重視した評価が大切であるため、対象者の生活史や生活環境に対する評価の視点とその具体的方法について学修する。	共同
		義肢装具学演習	身体各部位ごとの代表的義肢・装具の名称及び機能を理解し、各疾患と機能・構造障害との関連性を理解することにより、疾患や障害に適した義肢・装具を選択し、また義肢・装具のチェックアウトが行えることを目的とする。また、義肢・装具の変遷、近年の適応、義肢・装具の構造や機能、評価法を学び、義肢を利用する切断患者のリハビリテーションや装具を使ったリハビリテーションについても学修する。	
		理学療法技術実習Ⅰ(運動関節学的手技)	関節可動障害、筋機能障害、運動時の痛みなどの運動機能障害に対する理学療法は、理学療法士として高いレベルの知識と技術を有することが大切である。本講義では、運動機能障害理学療法の一治療手技である徒手治療手技について、運動関節学的手技の理論的背景と基本的事項について学修する。四肢、脊柱の関節可動障害に対する関節モビライゼーションの基本的治療手技を演習し、臨床実施上のポイントについて学修する。	
		理学療法技術実習Ⅱ(神経筋促通手技)	(概要)固有受容性神経筋促通手技(PNF)の基本概念と原理を理解し、基本手技ができるように学修する。また、機能評価に役立て、治療プログラムの立案に応用できるように学修する。更に、実技演習を通して、疾患別の応用が適切にできるように学修する。 (オムニバス方式/全15回) (9)柳澤 健/6回 固有受容性神経筋促通手技(PNF)の基本概念と基礎技術について学修する。特に、下肢への実技実習を通して、疾患別の評価・治療ができるように学修する。 (75)富田 浩/9回 固有受容性神経筋促通手技(PNF)の基本概念と基礎技術について学修する。特に、上肢および頸部・体幹への実技実習を通して、疾患別の評価・治療ができるように学修する。	オムニバス方式
		理学療法技術実習Ⅲ(生体観察手技)	解剖学・運動学と運動療法との関わりについて学修する。特に整形外科分野においての評価・治療の流れを実習を通して学修する。これまでに学んだ解剖学や運動学を理学療法場面にあてはめ、評価や治療に繋げることが出来るように学修する。	
		理学療法治療学実習Ⅰ(脳障害)	脳障害の病態生理や医学的治療、リスク管理について理解し、理学療法評価や治療方法について学修する。特に脳卒中は、社会の高齢化や生活習慣の欧米化などの要因により増加の一途を辿り、理学療法士の臨床研究の焦点となっている。評価や治療手技を実習の中で実演・経験し、その治療方法について学修する。	
		理学療法治療学実習Ⅱ(ICU)	呼吸器疾患、循環器疾患の医学的知識、病態、解剖学、生理学の理解を深め、理学療法がどのように展開されているかをエビデンスを基に学修する。具体的な疾患は、肺炎、慢性閉塞性肺疾患、神経筋疾患、急性心筋梗塞、慢性心不全、閉塞性動脈硬化症などを中心に行う。また、リスク管理の一環として、救命処置の知識や、血液データの活用法、胸部レントゲン写真や胸部CT画像の診かたについても学修する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目(理学療法専攻)	理学療法治療学実習Ⅲ (スポーツ障害)	(概要) 競技スポーツから健康維持を含めた生涯スポーツ場面で生じやすい傷害に対して理学療法士として適切に対応するための知識・技術について学修する。スポーツ障害の病態と発生機序を理解し、スポーツ選手の体調を管理し、外傷・障害を予防するための理学療法について学修する。競技復帰する過程のアスレチックリハビリテーションを実践するために必要な知識と技術について学修する。 (オムニバス方式/全15回) (57) 森本 哲郎/7回 スポーツと年齢(発育期・中高年齢期)、メディカルチェック、スポーツと内科的疾患、スポーツ現場における一次救命処置・現場における外科的処置、スポーツ外傷・障害各論について学修する。 (58) 山田 義久/8回 スポーツ医学概論、スポーツとバイオメカニクス(ランニング・ジャンプ・カッティング・スローイング)、スポーツ外傷・障害の理学療法、テーピング、ストレッチングについて学修する。	オムニバス方式
	理学療法治療学実習Ⅳ (障害者スポーツ)	障害者スポーツは、社会参加を目的としたスポーツと日常生活の自立やリハビリテーションの一環として行われる医療的スポーツに大別される。この科目では、全ての障害者が障害の種類や程度に応じて、それぞれに適したスポーツやレクリエーションに参加できるように、スポーツの意義・効果、指導方法、注意事項、障害に応じたスポーツの工夫について学修する。また、日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導者制度についても学ぶ。	
	臨床理学療法技法演習 (PBL)	この講座においては、学生が相互に模擬症例となり評価のシミュレーションを行い、国際生活機能分類(ICF)の考え方に基づき理学療法評価全体の流れについて学修する。その中で運動機能評価を中心に、得られた情報を統合・解釈し、問題点を抽出し、目標を設定し、理学療法プログラムを立案し、考察するという具体的な理学療法評価の組み立てについて学修する。	共同
	地域理学療法学	地域リハビリテーションとは、生活拠点に立脚し、保健・医療・福祉・生活・介護に関わる理念と技術が統合されたものである。理学療法を中心に、幅広く地域リハビリテーションに関わる理念、医療モデル・生活モデルの流れと関連性、生活評価、各種サービス供給能力とその連携などに関する理解を深め、地域活動における理学療法士の在り方について学修する。	
	地域理学療法学演習	リハビリテーション医療は施設・病院から在宅へと、地域を基盤として展開が図られ、維持期(生活期)リハビリテーションと統合し、疾患・障害から、生活を基盤とした新たなリハビリテーションの展開が強く求められている。本講義では、保健・医療・福祉の動向を踏まえて、地域における理学療法の方法論(通所・入所・訪問・介護予防など)を学び、地域リハビリテーションの考え方、システム、チームアプローチの重要性、理学療法士の役割について学修する。	
	生活環境支援理学療法実習	地域リハビリテーションを支える生活環境支援について、社会福祉制度を知るとともに、生活環境としての居住環境を中心に学修する。具体的には、バリアフリー・ユニバーサルデザインの基本、家屋調査の考え方と実際、住宅改修の目的と適合判定からそれらを作製する過程に必要な知識と技術について学修する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目	地域理学療法学	機能代償支援理学療法実習 (概要) 在宅障害者や高齢者の生活をより豊かにし、自立生活や介護負担軽減を図るために用いる福祉用具について、その種類と機能、特性を解説し、生活範囲の拡大を目指した福祉用具の適用原則と注意点について学修する。また、現在の医療・福祉における福祉用具に関連した制度についても学修する。 (オムニバス方式/全15回) (1) 明崎 禎輝/10回 福祉用具の定義、福祉用具活用の目的と効果、福祉用具の種類と機能、福祉用具と理学療法士の役割、起居・移乗・移動・ADLに関する福祉用具の適応と活用方法の実際について学修する。 (2) 有光 一樹/5回 様々な活動を行うためには、安定した座位姿勢の確保が重要である。座位姿勢におけるシーティングの目的・評価・適応について、事例を通して学修する。	オムニバス方式
		ヘルスプロモーション演習 これまでの理学療法士は、その対象を「障害を有する人」とし、基本的な動作能力の回復を図るために、主に病院で「治療」を行ってきた。しかし今日、理学療法士に対するニーズは、治療という観点のみならず、病気や怪我の予防、高齢者の要介護状態になることの防止、障害を抱えながら生活する人々への支援、健康増進などQOLの立場からもその期待が高まっている。本講義では、リハビリテーション医療の中心的役割を担ってきた従来の理学療法に加え、疾病予防や介護予防、健康増進を含んだ包括的な理学療法の理論と実践について学修する。	
		理学療法臨床実習Ⅰ 臨床の場における理学療法の実際について学修するため、理学療法の提供の場である病院および施設において行う。医療専門職として基本となる病院や施設の仕組みと、各部門間の役割と理学療法士の業務について学ぶ。具体的には、病院や施設等における理学療法の実際と対象者の概要について学ぶとともに、併せて医療専門職としての基本的態度を身につけられるよう、指導者や関係スタッフ、対象者とのコミュニケーションを体験する。	
	理学療法臨床実習	理学療法臨床実習Ⅱ 理学療法士としての基本的態度を身につけるとともに、理学療法の評価を実際に学修するため、理学療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、臨床場面において対象者の評価として、情報収集、検査・測定、観察、結果の統合と解釈、解決すべき課題の列挙を体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告することを体験する。学内での事後学修として、理学療法プログラムの立案について学修する。	
		理学療法臨床実習Ⅲ 理学療法士としての基本的態度を身につけるとともに、理学療法の評価から治療・援助に至る一連の流れについて学修するため、理学療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、臨床場面において対象者の評価として、情報収集、検査・測定、観察、結果の統合と解釈、解決すべき課題の列挙、理学療法プログラムの立案、理学療法プログラムの実施までを体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告すること、他職種とのリハビリテーションのチームアプローチを体験する。	
		作業療法概論 作業療法における作業の考え方や、対象となる疾患、対象者の理解などに関する、基本的知識や技術について学修する。具体的には、作業療法の目的と役割、ひとと作業の関係、対象者の概要、作業療法の仕事内容などであり、将来作業療法士として従事するための動機付けとなる基本的な内容について学ぶ。	
	基礎作業療法学	生活活動と障害 生活の中で作業療法の対象となる人が、自身の望む生活活動ができるようになるための援助方法と基本的態度について学修する。具体的には、障害者自身の経験談や障害者の疑似体験を通して、様々な障害の特性を理解する。また、作業療法実施施設の見学を行い、生活活動と作業療法の位置づけについても学ぶ。	共同

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目 専門基幹科目（作業療法学専攻）	基礎作業療法学	基礎作業学実習	作業が人の生活・健康・文化とどのように関係しているかを理解し、作業遂行における治療的意義と主観的意味について学修する。具体的には、作業の分類、作業遂行に関する身体機能的・精神機能的・発達学的・認知行動的見地からの分析、作業を実践するための作業の持つ特性や治療的効果について学ぶ。作業演習種目は、手工芸活動など趣味や余暇に関するものを中心に行い、体験した作業に対し基本的な分析を行うとともに、臨床応用を考える。	共同
		応用作業学実習	作業療法における治療活動として、木工などの作業活動の制作過程を学び、様々な道具の取り扱いと作業技術を習得するとともに、対象者へ指導できる技術も学修する。また、作業療法における治療活動の一つとして、作業分析を通じ治療場面への応用を考え、身体障害や精神障害など各疾患における問題点に対する治療的介入について応用的に活用できるように学ぶ。また、自助具の考案・作成も行う。	共同
		作業療法セミナー	作業療法の専門性に対する興味・関心を高めるために、基礎分野と専門分野の関連性について学修する。具体的には、文献検索・文献収集の方法を学習し、文献の内容が理解できるよう、文献抄読などを通して学習の基本的な方法について、グループで意見交換を行いながら進める。	
		作業療法管理学	<p>(概要) 作業療法士として働くための基本的な業務管理について学修する。具体的には、職業倫理について考えるとともに、作業療法士として必要な記録・報告、診療録や患者情報の取り扱い、リスクマネジメントなど、作業療法部門の管理・運営に関する基礎知識について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全8回)</p> <p>(16) 平松真奈美/5回) 作業療法士としての職業倫理や、記録・報告の種類と記載内容、診療録や患者情報の取り扱いなどについて、従事するために必要な作業療法部門の管理・運営に関する基本的知識について学ぶ。</p> <p>(121) 矢野 勇介/3回) 作業療法士として従事するための感染症対策やリスクマネジメント、インシデント・アクシデント発生時の対処方法など、対象者の安全に関する基礎知識について学ぶ。</p>	オムニバス方式
	作業療法評価学	基礎作業療法評価学	作業療法を実施するにあたって、対象者が本人なりの生活をおくるために必要な解決すべき課題と、生活の目標を見出すことが求められる。この過程が評価であり、この科目では、作業療法で用いる評価の意味、評価の対象、評価の手段などを中心に作業療法評価の基本的な考え方・枠組みについて学修する。具体的には、作業療法と国際生活機能分類(ICF)、作業療法評価項目、評価計画などである。	
		作業療法評価実習Ⅰ(身体系)	身体障害における評価の概念を広く理解し、各検査の意義や目的、方法について学修するとともに、その結果の解釈について理解する。具体的には、関節可動域検査、バイタルサイン、形態測定、筋緊張検査、片麻痺機能検査、感覚検査、反射・反応、腱反射、病的反射、協調性検査、徒手筋力検査などである。また、障害の視点としての国際生活機能分類(ICF)を用いた結果の統合と解釈についても学ぶ。	共同
		作業療法評価実習Ⅱ(精神・認知系)	精神障害における評価の概念を広く理解し、各検査の目的、方法について学修するとともに、その結果の解釈について理解する。具体的には、情報収集、観察、面接、作業面接、評価(検査)について、一連の流れと技法の実践である。ロールプレイを用いたインタビュー面接や、作業面接を用いた観察方法について学ぶ。また、作業遂行チェックリストやプロセスレコードを用いた観察の技法についても学ぶ。そして、各疾患における障害の視点としての国際生活機能分類(ICF)を用いた結果の統合と解釈についても学ぶ。	共同

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目（作業療法学専攻）	作業療法評価学	<p>（概要）発達障害における評価の概念を広く理解し、身体的、精神的、心理的、社会的な側面からの各検査の目的、方法について学修するとともに、その結果の解釈について理解する。具体的には、脳性麻痺を中心とした障害児の評価と、感覚統合機能の評価についてであり、障害の視点としての国際生活機能分類（ICF）を用いた結果の統合と解釈についても学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（18）篠田かおり／10回） 正常発達の過程を踏まえ、脳性麻痺を中心とした障害児の身体機能や知的機能などに関する各種検査の目的と方法についてと、国際生活機能分類（ICF）を用いた結果の統合と解釈について学修する。</p> <p>（48）吉岡 和哉／5回） 正常発達の過程を踏まえ、感覚統合機能を中心とした感覚・知覚・学習機能などに関する各種検査の目的と方法についてと、国際生活機能分類（ICF）を用いた結果の統合と解釈について学修する。</p>	オムニバス方式
	作業分析学	<p>作業療法を実施するために必要な分析の理論と方法について学修する。具体的には、日常生活における各種作業活動の分析理論である人間作業モデル、カナダ作業遂行モデル、AMPSなどの考え方を学ぶ。</p>	
	作業分析演習	<p>作業分析学にて学んだ考えに基づいて作業活動を分析するとともに、作業療法の対象者の身体機能や精神機能などを踏まえて、日常生活における様々な作業活動を治療や指導の手法として用いるために必要な計画の立案、指導方法の検討について学ぶ。</p>	共同
	基礎作業療法治療学Ⅰ（身体系）	<p>身体障害に対する作業療法の体系と基礎技術、状態における治療原則及び作業療法への応用を学修する。具体的には、関節可動域障害、筋力低下、筋緊張異常、感覚障害、巧緻性障害、協調性障害、持久力低下、廃用症候群などに対する治療理論について学び、併せてその技法について、リスク管理とともに学ぶ。</p>	
	基礎作業療法治療学Ⅱ（精神・認知系）	<p>精神障害に対する作業療法の体系と基礎技術、状態における治療原則及び作業療法への応用を学修する。具体的には、精神科作業療法の理念・目的と役割ならびに基本的視点、併せて精神保健医療福祉の動向を踏まえ、各疾患の回復状況に応じた症状と障害に対する作業療法について、リスク管理とともに学ぶ。</p>	
	作業療法日常生活活動学	<p>日常生活で基本として行われる移動、更衣、食事、排泄などの代表的な動作（日常生活活動：ADL）を取り上げ、それらの動作の分析、評価方法と障害を有する患者のトランスファーや歩行補助器の使用など生活自立を目指した指導方法について学修する。また、生活の質についての基本的な考え方についても学修する。</p>	
	日常生活支援作業療法実習	<p>作業療法の中でも主要な領域である日常生活活動（ADL）および日常生活関連活動（IADL）・その他生活全般について、その概念と作業療法士の役割、指導について学修する。具体的には、IADLの分類、動作分析とそれぞれの活動の持つ意義を理解し、疾患がADLとIADLに及ぼす具体的な影響について考え、作業療法における評価・計画立案・指導の一連の流れを学ぶ。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目(作業療法学専攻)	義肢・装具作業療法実習	(概要) 切断と義肢の基礎的知識、また装具の基本的知識と対象疾患ならびに適応について学修する。具体的には、義手・義足、スプリントなどの装具の構造を理解し、チェックポイントを学ぶとともに、臨床でよく用いられる上肢・手指用のスプリントを作製する。併せて、義肢・装具の操作方法や日常生活への応用について学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (22) 濱田 和範/7回 身体各部位ごとの代表的義肢・装具の名称及び機能を理解し、各疾患と機能・構造障害との関連性について学修する。疾患や障害に適した義肢・装具の選択と、義肢・装具のチェックアウトについても学修する。 (49) 仲木 右京/8回 上肢装具・スプリントの対象疾患、種類と適応、スプリントのチェックポイントと上肢・手指用スプリントの製作、日常生活への応用などの作業療法プログラムについて学修する。	オムニバス方式
	身体障害作業療法実習Ⅰ (中枢神経系)	身体障害領域の中でも、中枢神経疾患(脳血管障害・神経変性疾患など)に対する作業療法の治療理論、技法の基本的知識を学修する。具体的には、脳血管障害、失調症、パーキンソン病などの病態像と機能障害の関係、合併症、作業療法評価における国際生活機能分類(ICF)を用いた障害の捉え方、作業療法計画立案、急性期・回復期・維持期の作業療法、ADLアプローチまでを、事例を通して学ぶ。	共同
	身体障害作業療法実習Ⅱ (脊髄・運動器系)	(概要) 身体障害領域の中でも、脊髄・運動器(骨・関節・筋疾患)系の障害に対する作業療法の治療理論、技法の基本的知識を学修する。具体的には、頸髄損傷、関節リウマチ、手の外科疾患などの病態像と機能障害の関係、合併症、作業療法評価における国際生活機能分類(ICF)を用いた障害の捉え方、作業療法計画立案、急性期・回復期・維持期の作業療法、ADLアプローチ、機能代償アプローチまでを事例を通して学ぶ。 (オムニバス方式/全23回) (20) 石元美知子/12回 頸髄損傷の作業療法評価における国際生活機能分類(ICF)を用いた障害の捉え方、作業療法計画立案、急性期・回復期・維持期の作業療法の内容について、事例を通して学修する。 (60) 佐藤 信治/5回 関節リウマチなどの関節疾患の作業療法評価における国際生活機能分類(ICF)を用いた障害の捉え方、作業療法計画立案、急性期・回復期・維持期の作業療法の内容について、事例を通して学修する。 (17) 大塚 貴英/6回 骨折などの外科疾患の作業療法評価における国際生活機能分類(ICF)を用いた障害の捉え方、作業療法計画立案、急性期・回復期・維持期の作業療法の内容について、事例を通して学修する。	オムニバス方式
	身体障害作業療法実習Ⅲ (内部系)	代表的な内科系疾患について、対象となる臨床像を理解し、障害に対する作業療法の目的と役割ならびに基本的視点と評価技法、治療、指導、援助方法(ADL・IADL・リスク管理など)を学修する。具体的には、呼吸器疾患、循環器疾患(心大血管疾患)などについて、事例を通して学ぶ。	
	精神障害作業療法実習Ⅰ	精神障害における作業療法の実際について、回復状況に応じた作業療法、地域生活・就労支援、リスクマネジメント、評価・手順・治療について学修する。具体的には、統合失調症、気分感情障害、アルコール依存症、人格障害、摂食障害、てんかん、神経症性障害などの各疾患について、事例を通して学ぶ。	共同

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 基幹 科目 (作業 療法 学専 攻) 職業 専門 科目 作業 療法 治療 学	精神障害作業療法実習Ⅱ	関連理論に基づいて、精神障害における実際の作業療法の流れについて学修する。具体的には、作業療法において用いられる面接技法、レクリエーション活動、創作活動などの各種活動について、オリエンテーション、計画・立案、準備、実行、振り返りまでの一連の流れを、患者対応を含めて学修する。	共同
	老年期障害作業療法実習Ⅰ	老年期障害に対する作業療法の目的と役割ならびに基本的視点について、老年期特有の生活課題と生活活動障害に対する作業療法の内容について学修する。具体的には、老化と高齢者の状態、高齢社会の現状と課題、老年期障害の対象の特徴としての寝たきり高齢者、認知症高齢者、生活不活発病などの生活活動障害に対して、リスクマネジメントも併せて評価・計画・治療・支援について理解するとともに、事例を通して学ぶ。	
	老年期障害作業療法実習Ⅱ	老年期障害に対する作業療法の評価・計画・治療・支援とその実際について学修する。具体的には、寝たきり高齢者、認知症高齢者、生活不活発病、加齢に伴う各種疾患における障害に対する治療・支援方法である介助方法や居住環境の整備、レクリエーションや創作活動などの余暇活動について学び、事例に対する計画立案を行う。	共同
	発達障害作業療法実習	<p>(概要) 発達障害に対する作業療法の理念・目的と役割ならびに基本的視点と、医療・保健・福祉・教育の動向を踏まえ、各疾患における症状と障害に対する作業療法の治療理論と実践内容について学修する。具体的には、姿勢・運動機能、上肢機能、視覚機能、知的機能、心理社会的側面などの治療・援助であり、脳性麻痺などの重症心身障害、知的障害、学習障害、注意欠陥多動障害、広汎性発達障害などの発達障害について、事例を通して疾患別に学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>〔18〕 篠田かおり/10回) 脳性麻痺などの重症心身障害の作業療法評価における国際生活機能分類(ICF)を用いた障害の捉え方、作業療法計画立案、作業療法の内容について、事例を通して学修する。</p> <p>〔48〕 吉岡 和哉/5回) 知的障害、学習障害、注意欠陥多動障害、広汎性発達障害などの発達障害の病態像と機能障害の関係、合併症、作業療法評価における国際生活機能分類(ICF)を用いた障害の捉え方、作業療法計画立案、作業療法の内容について、事例を通して学修する。</p>	オムニバス方式
	高次脳機能障害作業療法実習	<p>(概要) 高次脳機能障害に対する作業療法についての基本的知識を学修する。具体的には、脳損傷や脳変性疾患による失行症、失認症、注意障害、記憶障害、遂行機能障害、前頭葉性運動障害などに対する検査・治療・支援方法(機能回復練習、生活技能の学習、役割の再獲得への支援など)について、事例を通して学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>〔78〕 筒井 裕介/5回) 失行症、失認症、注意障害、記憶障害、遂行機能障害、前頭葉性運動障害などに対する治療・支援(機能回復練習、生活技能の学習、役割の(再)獲得への支援など)についての基本的知識と方法を学ぶ。</p> <p>〔20〕 石元美知子・〔6〕 辻 美和/10回) (共同) 高次脳機能障害による生活活動障害に対する作業療法について、評価から機能回復のためのアプローチ、生活活動技能の獲得、役割の再獲得などの支援の実際を、失認症などの事例を通して学ぶ。</p>	オムニバス方式・ 共同(一部)

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
作業療法治療学	臨床作業療法技法実習Ⅰ(PBL)	作業療法士としての基本的態度を身につけるとともに、作業療法の対象者への接し方について学修する。礼儀正しい態度や言葉遣いを習得するとともに、治療者として必要なコミュニケーション能力についての知識をもとに、実習を中心とした技術学習を行う。具体的には、コミュニケーションの実際として、聞き取りやすい発音と話し方、身だしなみと態度・表情、報告・連絡・相談など、臨床場面を想定した技能について実習を行う。	共同
	臨床作業療法技法実習Ⅱ(PBL)	作業療法の対象領域(身体障害・精神障害など)における提示された事例の基本情報をもとに、疾患や障害の特徴、評価項目などを調べ、実際に評価の手順を計画するまでの過程について学修する。具体的には、提示された事例の映像などの資料をもとに、作業療法評価に関する以下の内容を行う。情報収集・面接・観察・検査測定の内容と方法について、事例に必要な評価項目を選定し、実施方法の確認、選定した評価項目が実施できるように実施手順を計画、対象者に説明できるようにオリエンテーションの準備、事例の模擬患者に対して評価を实践、事例の評価結果をもとに国際生活機能分類(ICF)を用いて全体像を把握し、優先順位をつけた解決すべき課題の列挙を行うまでの技能について実習を行う。	共同
専門基幹科目(作業療法学専攻) 職業専門科目	地域作業療法学	地域リハビリテーションの理念と定義を踏まえ、障害者・高齢者の地域生活における現状と課題について理解し、地域における生活障害への支援方法について学修する。具体的には、地域包括ケアシステム関連、介護保険法や障害者総合支援法などの制度に見られる地域リハビリテーションの概要と今後の展望、作業療法から見た生活障害の評価の要点、ケアマネジメント、在宅生活を支えるサービスの実践について学ぶ。	
	地域作業療法学演習	地域リハビリテーションにおける作業療法の理念と役割を踏まえ、対象者の生活課題に対する基本的視点、評価・計画・支援の実践について学修する。具体的には、障害者とその家族が望む地域における活動と参加ができるよう、訪問や通所における作業療法の実践について、事例を通して学ぶ。	
	生活環境支援作業療法実習	(概要) 地域リハビリテーションを支える生活環境支援について学修する。具体的には、作業療法士として必要となる家屋調査の考え方と実際、他職種との連携について、居住環境としてバリアフリー・ユニバーサルデザインの基本、住宅改修の目的ならびに環境調整前後の様子を事例を通して学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (62) 笹岡 和泉/4回) 居住環境としてバリアフリー・ユニバーサルデザインの基本、住宅改修の目的ならびに環境調整前後の状況などについて、事例を通して学修する。 (17) 大塚 貴英/11回) 作業療法士として必要となる家屋調査の考え方、調査のポイントと家屋内外の計測手法、住宅改修などの環境調整案、他職種との連携について、模擬事例を通して学修する。	オムニバス方式
	機能代償支援作業療法実習	(概要) リハビリテーションの代償的アプローチとして活用する補装具、日常生活用具、自助具、福祉機器などの種類と適用方法について学修する。具体的には、自助具・福祉機器と作業療法士の役割、起居・移乗・移動、ADLに関する自助具・福祉機器の適応、シーティングである。 (オムニバス方式/全15回) (79) 土居 道康/7回・(80) 篠森 丞/3回) 自助具・福祉機器と作業療法士の役割、起居・移乗・移動、ADLに関する自助具・福祉機器の種類と適応について学修するとともに、日常生活場面における指導方法について事例を通して学修する。 (21) 有光 一樹/5回) 様々な活動を行うためには、安定した座位姿勢の確保が重要である。座位姿勢におけるシーティングの目的・評価・適応について、事例を通して学修する。	オムニバス方式
	地域作業療法学		

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目 (作業療法学専攻)	地域作業療法学	就労支援作業療法演習 (概要) 職業リハビリテーションの目的と意義を理解し、当該分野における作業療法士の役割および職業リハビリテーションに関する基本的知識と技術を学修する。具体的には、作業療法の役割、職業前評価、職業評価(各種ワークサンプル、職業適性検査など)、作業療法の内容について、事例を通して学ぶ。 (オムニバス方式/全15回) (20) 石元美知子/8回) 職業リハビリテーションに関する基礎的知識と作業療法士の役割、職業前評価、職業評価、作業療法の内容について、身体障害などを中心に事例を通して学修する。 (15) 足立 一/7回) 職業前評価、職業評価、作業療法の内容と、就労生活に必要な生活技能へのアプローチなど就労継続に繋げる支援方法について、精神障害・知的障害などを中心に事例を通して学修する。	オムニバス方式	
		生活活動マネジメント 生活活動におけるマネジメントは、高齢者の地域生活における本人のしたい生活活動の行為に行動計画の焦点が当たるよう設計されている。この科目では、プロセスに沿って、生活活動の行為の障害に対する支援策について、事例を通して学修する。具体的には、各プロセスにおいて使用するシートを用いて、事例の状況についての情報を整理し、本人の望む生活活動の行為の向上に必要な練習・支援・調整について学ぶ。		
		地域支援Ⅰ(余暇活動) 障害の有無や年代にかかわらず、自分の好む活動を楽しむことは、生き甲斐にもつながり、生活の質を考えた場合には重要な意味を持つ。この科目では、地域において行われている様々な余暇活動の特徴について学修するとともに、障害者・児や高齢者が地域で取り組めるようにするための方法についても学修する。		
		地域支援Ⅱ(認知症) 認知症の方々とその家族が地域で安心して生活するためには、地域の人々が認知症に対する正しい知識を持つとともに、自分なりにできる簡単なことから援助を行うことが重要である。この科目では、認知症の方々とその家族の生活を支援するために必要な知識を学修し、相互扶助・協力・連携、ネットワークなど、地域でできる支援方法について学修する。		
	作業療法学臨床実習	作業療法臨床実習Ⅰ 臨床における作業療法の実践について学修するため、作業療法の提供の場である病院および施設において行う。医療専門職として基本となる病院や施設の仕組みと、各部門間の役割と作業療法士の業務について学ぶ。具体的には、病院や施設等における作業療法の実践と対象者の概要について学ぶとともに、併せて医療専門職としての基本的態度を身につけられるよう、指導者や関係スタッフ、対象者とのコミュニケーションを体験する。		
		作業療法臨床実習Ⅱ 作業療法士としての基本的態度を身につけるとともに、作業療法の評価を実際に学修するため、作業療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、臨床場面において対象者の評価として、情報収集、検査・測定、観察、結果の統合と解釈、解決すべき課題の列挙を体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告することを体験する。学内での事後学修として、作業療法プログラムの立案について学ぶ。		
		作業療法臨床実習Ⅲ 作業療法士としての基本的態度を身につけるとともに、作業療法の評価から治療・援助に至る一連の流れについて学修するため、作業療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、臨床場面において対象者の評価として、情報収集、検査・測定、観察、結果の統合と解釈、解決すべき課題の列挙、作業療法プログラムの立案、作業療法プログラムの実施までを体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告すること、他職種とのリハビリテーションのチームアプローチを体験する。		

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目(言語聴覚学専攻) 基礎言語療法学	言語聴覚障害学総論Ⅰ	(概要) 言語聴覚士法が制定するまでの過程などについて学修し、言語聴覚士についての理解を深める。また、仕事の実際について説明する中で、職業倫理やリスク管理(感染予防を含む)について学修し、言語聴覚士としてだけでなく、医療人として、また、社会人として何が必要であるかについて学修する。 (オムニバス方式/全15回) (6) 武内 和弘/7回 言語聴覚士とは何かについて、言語聴覚士法を中心に、制定されるまでの歴史や、言語聴覚士の業務対象や業務内容、免許、補助行為、多職種との連携や指示、守秘義務等、名称独占等について学修する。 (3) 石川 裕治/8回 言語聴覚士の仕事について、実際の業務を紹介し、一日の業務の流れや、年間の業務等について学修する。その中で、言語聴覚士に必要な他者との接し方や、職業倫理やリスク管理等について学修する。	オムニバス方式
	言語聴覚障害学総論Ⅱ	(概要) 言語聴覚士の専門的役割である言語聴覚療法について理解を深める。情報収集、インテーク面接、検査、評価、訓練といった言語聴覚療法について解説し、それぞれの目的や必要性、また方法について学修する。また、言語聴覚士の対象についても触れ、それぞれの原因や特徴について説明し、今後学修する各論との関連性についても理解を深める。 (オムニバス方式/全15回) (3) 石川 裕治/10回 言語聴覚療法について、臨床の流れをもとに学修する。情報収集やインテーク面接、検査・評価や訓練についてその目的や必要性、方法について学修する。また、今後受講する各科目間の関連性を説明し、言語聴覚士に関しての理解を深める。 (6) 武内 和弘/5回 言語聴覚士の対象について学修する。小児領域の先天性障害や成人領域の後天性障害まで、その原因、症状について学修し、医学領域、専門領域の各科目の関連性について学修する。	オムニバス方式
	失語症学	言語機能の障害は、理解や表出など様々な側面があり、脳の中で起こり、実際には外部から視ることができない非常に複雑な機能である。そのような言語機能の障害である失語症は言語聴覚士にとってもっとも重要な障害の一つである。失語症の研究の歴史や大脳の機能の理解を深めた上で、定義、古典的分類、症状、重症度、検査、評価など基礎的な知識について学修する。また、事例を通して、失語症者の観察を行い症状等について学修する。	
	聴覚系医学	(概要) 聴覚器官は、言語発達や危険認識、コミュニケーションなど人が生活を行なう上でとても重要な器官である。聴器の構造と機能(生理)を理解し、難聴疾患に対する知識を習得する。外耳、中耳、第8神経、聴覚中枢の解剖と機能、聴力検査とその評価、難聴を起こす病態と治療、対応、平衡機能と平衡障害、顔面神経麻痺について知識を深め、人工中耳や人工内耳などの仕組みについて学修し、言語聴覚士として、聴覚にどのように関わっていくかについて学修する。 (オムニバス方式/全15回) (67) 小林 泰輔/7回 聴器の構造と機能、内耳疾患、人工中耳と人工内耳、難聴と社会福祉、聴覚健診について理解する。 (68) 伊藤 広明/8回 聴覚機能と検査、外耳・中耳疾患、内耳機能と平衡機能検査、めまい疾患、顔面神経麻痺等について理解する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目(言語聴覚学専攻) 基礎言語療法学	音声・言語系医学	<p>(概要)呼吸・発声・発語(構音)・嚥下器官の構造と生理・検査法・疾患概要について演習を交えて講義を行なうことで、呼吸・発声・発語(構音)・嚥下器官の構造と生理を理解し、疾患の病態と治療の説明をすることができることを目標とする。言語、音韻と構音の生理学的過程を説明した後に、呼吸調節、喉頭調節、付属管腔の調節の3つのカテゴリーに大きく分類し、それぞれの診断や治療について学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(47 奥谷 文乃/4回) 呼吸調節における、解剖・生理・病理、検査法・治療、言語聴覚士の役割について理解する。</p> <p>(78 兵頭 政光/7回) 喉頭調節における、解剖・生理・病理、検査法・治療、言語聴覚士の役割、および付属管腔の調節について理解する。</p> <p>(79 長尾明日香/4回) 喉頭調節、特に嚥下機能、音声機能における検査法・治療について理解する。</p>	オムニバス方式
	発達心理学	人間の発達段階における、言語の正常発達を中心に学修する。各発達段階において、どのように言語が獲得されていくのか、また、聴覚との関連や養育者との関連や、保育、学校教育のどのように関連するのかについて理解を深める。	
	言語学	日常、問題なく話している日本語を通し言葉を考え、世界の言語の普遍性と特異性について知ることを、授業の目標とする。授業の主題は、日本語を再認識し、心的レキシコンについて考え、また、記号としての言語を考えることである。授業の内容としては、言語理論、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論について学ぶ。次に、言語の普遍性、コミュニケーションとしての言語について学修する。	
	音声学	日ごろ、気にもしていない音声上の出来事が、じつは厳密に出来上がっていることを知る。さらに、理屈を知ると同時に、相手の音声上の特徴を知り、矯正できる能力を養うことを、授業の目標とする。授業内容としては、話し言葉と書き言葉、アクセントの表記・型・式、母音・子音、調音点・調音法について学ぶ。さらに、IPA表記、異音、アクセント・イントネーション、拍と節等についても学習を進める。	
	音響学(聴覚心理学を含む)	音響学の基礎的事項を理解し、言語聴覚士としての臨床活動において、音響・音声・聴覚に関することがらを科学的に取り扱うための基礎的能力を養う。「音の3要素」「音の周波数」といった、音響学の基本から、「周波数分析の原理」「サウンド・スペクトログラム」といった専門的な分野を学習し、「音」の物理学を理解し、音響や聴覚機能に関する客観的記述方法、聴覚心理学的概念、音声や聴覚などの臨床的な評価方法などについて学ぶ。	
	聴覚障害学	聴覚障害児(者)に対する、言語聴覚士としての必要な知識について学修する。聴覚の正常発達を学修した後に、先天性・後天性の難聴の原因、症状について学び、聴力検査、補聴器・人工内耳に関しても学修する。難聴児のリハビリテーションに関しては、様々なコミュニケーション手段があり、読話・手話・聴覚一口話法、バイリンガル教育など各種の知識を深め、事例を通して実際の指導内容についても学修する。	
	音声障害学実習	音声障害に対する言語聴覚療法の現状について触れ、その上で、音声障害の定義、症状、原因疾患、検査・評価、治療・訓練について学修する。特に、耳鼻咽喉科医との連携が重要となるため、耳鼻咽喉科医と言語聴覚士の役割について理解を深め、また、様々な発声法や検査・訓練法については実技を取り入れ、知識と技術の習得を目的に学修する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目(言語聴覚学専攻) 基礎言語聴覚学	学習・認知心理学	言語聴覚士として、必要な認知機能が形成・獲得される過程とその機序、認知機能の諸相、および認知機能を背後で支える高次神経機構などについての知識を獲得する。特に、認知心理学の中で、「感覚知覚」「認知」「学習」「記憶」の4項目について学ぶ。感覚については種類、物理量と心理量、順応と対比などについてである。認知に関しては、奥行き知覚、図地の分化、認知地図、対人知覚、感覚遮断などである。学習は条件づけに関して、記憶は過程と分類や、記憶範囲・容量に関して学習する。	
	言語発達学	言語(ことば)は、ヒトが生まれて成長する過程での脳神経系の発達、十分な感覚入力と言語環境の下で、獲得する。本講義では、ことばが出現するために必要な基礎的能力が発達する乳幼児から、会話でのやりとりが発達する幼児期、さらにコミュニケーション能力や文字を活用する児童期までのことばの発達について学修する。また、ことばの発達に大きく関わる社会性の発達、認知発達についても学び、それぞれの領域で苦手さを持つ子どもについても触れる。	
	高次脳機能障害学	(概要) 意識レベルなどの背景症状、注意障害といった一般症状について理解をした上で、視覚、体性感覚、運動などの高次脳機能障害について学修する。また、各障害についての、脳の病巣やメカニズム、症状の特徴について学修する。また、事例を通して、高次脳機能障害者の観察を行い症状等について学習するとともに、検査法や訓練法について学修する。 (オムニバス方式/全8回) (③石川裕治・②0石元美知子/4回) (共同) 大脳の局在性、高次脳機能障害のメカニズムについて理解する。背景症状や一般症状、また、各高次脳機能障害について原因や症状について学修する。 (58 池 聡/4回) 事例を通して、高次脳機能障害者の観察を行い症状等について学習するとともに、検査法や訓練法について学修する。また、この領域は他職種が係るため、検査や評価、治療を行う上で、どの職種がどのように関わるのかといった役割分担についても理解する。	オムニバス方式・共同(一部)
	言語発達障害学	言語発達障害の評価・診断・治療を行うために必要な基本的知識を学修する。発達段階とともに、各発達段階での訓練内容について学び、言語発達障害について具体的なイメージを持つとともに、臨床の流れについて学修する。評価の重要性を理解するため、事例を通して検査技法、評価の枠組み、記録法、報告書作成のしかたについて学修する。	
	重複障害学	(概要) 言語聴覚士が対象とする先天的障害である、脳性麻痺、重複障害について学修する。脳性麻痺は脳損傷に由来する症候群であり、知的発達障害、視覚障害、聴覚障害、てんかん、視覚・聴覚の認知発達障害、情緒面や行動面の発達障害など、二重三重の障害を合併することがある。重複した障害のある対象児のことばの発達の特徴を理解し、コミュニケーション発達支援に必要な知識について学修する。また、発達時期にそった家族指導についても学修する。また、事例を通して重複障害者の観察を行い症状等について学修する。 (オムニバス方式/全8回) (116 谷本愛裕美/4回) 脳性麻痺や重複障害の定義や種類、原因や症状、診断基準など基本的な知識について学修する。また、検査や評価の仕方について、臨床場面を紹介し、言語聴覚士の役割についても学修する。 (⑫ 稲田 勤/4回) 脳性麻痺、および重複した障害のある対象児のことばの発達の特徴を理解し、コミュニケーション発達支援に必要な知識について学修する。また、発達時期にそった家族指導についても学修する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 専門基幹科目（言語聴覚学専攻） 基礎言語聴覚学	学習障害・広汎性発達障害学	（概要）ADHD、自閉症、発達性読み書き障害、広汎性発達障害、発達性協調運動障害、視空間認知障害、学習障害の病理・生理の理解とその訓練方法を学習する。それぞれの障害の特性から起こるコミュニケーション上の問題点や学校生活での問題点、またその対処法、訓練法について解説を行う。 （オムニバス方式／全8回） （101 濱崎佳瑞子／4回） ADHD、自閉症、発達性読み書き障害、広汎性発達障害、発達性協調運動障害、視空間認知障害、学習障害について、原因や症状の特徴について学修する。 （12 稲田 勤／4回） 各種障害に対する検査や評価の仕方、訓練等アプローチの基本的な知識について学修する。また、家族支援、教育現場に対する支援についても理解を深める。	オムニバス方式
	機能性構音障害学実習	構音障害の類型の1つである機能性構音障害の特徴を理解し、そのスピーチ・セラピーの一連の流れを学修する。すなわち、正常構音発達の理解に基づき、いわゆる未熟構音と異常構音の鑑別、構音および構音器官の構造と機能の検査、生育歴調査、言語発達などの関連心理検査等の実施法について演習形式で学ぶ。ついで指導目標（ゴール）と方針の策定、詳細な訓練計画の立案、指導する障害音の選定と多様な訓練技法を実践的に学修する。	
	器質性構音障害学実習	器質性構音障害とその背景にある異常の基本的概念と知識について学修する。また、器質性構音障害および関連障害の評価・診断・治療に関する知識・技能・態度を身につけ、事例を通して、鼻咽喉閉鎖機能不全に関する検査、声と共鳴・構音の検査の理解を深める。異常構音の聴取や検査方法については実技を取り入れるとともに、事例を通して学修する。	
	運動障害性構音障害学実習	運動障害性構音障害の鑑別診断、評価、リハビリテーションについて学修する。発声発語器官の解剖・生理・病理、運動障害性構音障害の原因と分類、運動障害性構音障害の検査・評価の方法、運動障害性構音障害の鑑別診断、運動障害性構音障害の訓練の原則と実施上の留意点、運動障害性構音障害の訓練プログラムの立案、運動障害性構音障害の訓練の実際、報告書の書き方について学修する。発声発語および構音の検査、訓練の手技については実技を中心に学修する。	
	吃音学	吃音の歴史と現状を説明した上で、基礎的な分野として吃音の定義、症状、原因、テスト、評価、訓練といった、吃音に対する言語聴覚療法について学修する。また、吃音と類似する非流性発話等を説明し、その間別についても触れる。また、事例を通して、臨床的分野である検査の実際、訓練の実際について演習を行い、訓練に関しては、直接法、間接法等について理論と技術について学修する。	
	嚥下障害学実習	（概要）嚥下障害のアプローチを行う上で必要な、基礎知識について学修するとともに、どのように評価し、訓練を行うのかについて理解を深める。嚥下に必要な器官の解剖・生理、嚥下障害の定義・原因となりうる疾患等について学修する。また、検査・評価法・嚥下食の作成や口腔ケアに関しては、実技を通して技能等について学修する。 （オムニバス方式／全15回） （65 益田 慎／4回） 嚥下に必要な器官の解剖・生理、嚥下障害の定義・原因となりうる疾患等について学修する。 （64 土居 奈央／11回） 検査・評価法・嚥下食の作成や口腔ケアに関しては、実技を通して技能等について学修する。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目 専門基幹科目 (言語聴覚学専攻)	補聴器・人工内耳学	言語聴覚士として、聴覚障害児(者)に対し、最良と考えられる補聴器の適合・評価・装用指導などができるように、オーディオロジー学、補聴学に基づいた理論と技術について学修する。補聴学に必要なオーディオロジーの知識、補聴器・人工内耳の仕組み(構造)や機能に関して学習し、フィッティング理論について学修する。調整(アナログ・デジタル)だけでなく、イヤモールドの採型や評価・検査法、カウンセリングや装用指導に関しても学修する。		
	基礎言語聴覚学 言語聴覚療法セミナーⅠ	教員の指導のもと、グループ形式をとり、言語聴覚士を目指す医療従事者として必要な知識について総合的に学習する。医療分野に関する専門用語の読み方、意味に関して、調べ方など基本的な学習法について、受動的な講義形式の授業でなく、自ら調べることや一定時間集中することなどを行うことで、基本的な学習態度・学習習慣を身につけることを目的とする。単なるシェア学習に留まらず、活発な意見交換や効率の向上を目指す。	共同	
	言語聴覚療法セミナーⅡ	言語聴覚療法の専門性に対する興味・関心を高めるために、基礎分野と専門分野の関連性について学ぶ。具体的には、文献検索・文献収集の方法を学習し、文献の内容が理解できるよう、文献抄読などを通して学習の基本的な方法について、グループで意見交換を行いながら進める。単なるシェア学習に留まらず、活発な意見交換や効率の向上を目指す。	共同	
	言語発達障害検査実習	小児領域の臨床場面で実施されている検査について、目的や対象、実施方法について学修する。発達検査を実施しにくい乳幼児のための質問紙法を始め、言語性知能、動作性知能を測定できる発達検査、言語発達だけでなく身体発達を測定できる検査、言語学習能力を測定できる検査、言語発達遅滞検査、語彙発達検査、および視知覚認知面の発達検査について学修する。	共同	
	言語聴覚療法評価学 言語発達障害評価実習	「言語発達障害検査実習」で実施した検査について、その検査結果をどのように解釈するのかについて学修する。また、検査から得られたデータと生育歴から運動発達面、知的発達面、社会性など様々な情報とを照らし合わせ、評価としての、障害の有無、種類、発達レベル等、言語聴覚療法に必要な評価方法について学修し、それらを整理した症例報告の作成についても学修する。	共同	
	聴覚検査学	聴覚検査のおもな目的は聴覚障害の性質・程度の把握と難聴疾患の鑑別診断にある。小児・成人領域で用いられている、各種聴覚機能検査法について、目的、原理、結果の判定法について体系的について学修する。また、失語症、認知症など、聴覚障害が認められない症例に対する聴力検査の必要性についても学修する。		
	聴覚障害検査実習	「聴覚検査学」で学修した、各種聴覚機能検査法の実施方法について学修する。特に重要な、純音聴力検査、語音聴力検査、乳幼児聴力検査を中心に演習を行なう。また、障害の評価・診断に必要な聴覚検査法を、その目的や、症例に応じて検査が選択・実施でき、結果の判定ができることを目標に学修する。		

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目 言語聴覚療法評価学 専門基幹科目(言語聴覚学専攻)	失語・高次脳機能障害検査実習	失語・高次脳機能障害領域で実施されている検査について目的や対象、実施方法について学修する。失語症については、スクリーニング検査、鑑別診断検査、掘り下げ検査を中心に学修する。高次脳機能障害では、認知症、失行・失認について実施し、特に認知症については、簡易検査から複雑な検査について学修する。実施方法については、検査見本の観察とグループでの実習を通じて学修する。	共同
	失語・高次脳機能障害評価実習	「失語・高次脳機能障害検査実習」で実施した検査について、その検査結果をどのように解釈するのかについて学修する。主に失語症、認知症を中心に行い、失語症については、現病歴、既往歴、また脳の画像所見等を照らし合わせ、失語症の有無、タイプ分類、重症度について、また、予後予測をもとにゴール設定や訓練目的、方法についても学修する。認知症については、知的の低下のレベルを判断し、認知症の診断基準に達しているのか、また、日常生活や言語検査へどのように影響を与えているのかについて学修する。	
	発声発語・嚥下障害検査実習	発声発語・嚥下障害の領域の臨床現場で実施されている検査について、目的や対象、実施方法について学修する。構音に関しては、呼吸、発声発語器官、構音運動について、共鳴に関して、鼻咽腔閉鎖機能について、音声に関しては、呼吸機能、声質等について検査実習を行う。また、嚥下に関しては、認知機能、口腔機能、嚥下機能を中心とし検査実習を行う。	共同
	発声発語・嚥下障害評価実習	(概要) 「発声発語・嚥下障害検査実習」で実施した検査について、その検査結果をどのように解釈するのかについて学修する。各検査結果から、発声発語関連では、構音に関しては、呼吸から共鳴機能、音声に関しては、声質から発声持続等、嚥下に関しては、認知期から嚥下期までの評価方法について学修し、総合評価として、障害の有無、障害のタイプ、重症度など症例報告の書き方について学修する。 (オムニバス方式/全15回) (19) 光内 梨佐/8回 構音機能、音声機能といった発声発語領域について、検査結果から得られる評価について学修する。また、総合評価としての症例報告の書き方についても、事例を通して学修する。 (64) 土居 奈央/7回 嚥下領域について、認知機能から嚥下機能に関する検査結果から導き出される評価について学修する。また、総合評価としての症例報告の書き方について事例を通して学修する。	オムニバス方式
	心理測定法実習	現在用いられている様々な臨床検査の基礎を成している精神物理学的測定法、および観察法、面接法、質問紙法、検査法、実験法など多様な測定手法の基礎的な考え方と実践法に関わる基礎知識を身につけることを目的とする。また、グループワークを通して、心理検査の実施、実験計画の立案、質問紙調査の作成・実施・分析・結果の解釈を行う。最後にプレゼンテーションを行い、調査内容を他者に伝達する方法について学修する。	
	言語聴覚療法治療学	言語聴覚療法技術実習Ⅰ(言語発達障害)	「言語聴覚療法臨床実習Ⅰ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の準備として、小児領域の言語聴覚療法について学修する。「言語発達障害検査実習」および「言語発達障害評価実習」で学修した知識・技術を、実際の言語聴覚療法にどのように取り入れていくのか等、具体的な言語聴覚療法プログラムの立案・実施に関する学修を行う。また、小児の対象者および家族、またスタッフ等との接し方についても学修する。

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
職業専門科目 言語聴覚学専攻	言語聴覚療法治療学 専門基幹科目(言語聴覚学専攻)	言語聴覚療法技術実習Ⅱ (高次脳機能障害)	<p>(概要)「言語聴覚療法臨床実習Ⅰ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の準備として、高次脳機能領域の言語聴覚療法について学修する。特に、訓練プログラムの立案から、訓練を中心に学修する。また、実際の臨床現場における言語聴覚療法について、その基礎的知識と技術を学修するとともに、対象者やその家族、関連スタッフとの接し方についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(19) 光内 梨佐/10回) 認知症、失行・失行に関する検査結果から、具体的な訓練プログラムの立案、訓練の実際について学修する。また、対象者との接し方等、実際の言語聴覚療法における基本的態度についても学修する。</p> <p>(82) 井上 浩明/5回) 実際の臨床現場で行われている、高次脳機能障害者に対する言語聴覚療法について学修する。他職種との連携や、対象者・家族等への対応の仕方等についても学修する。</p>	オムニバス方式
		言語聴覚療法技術実習Ⅲ (失語)	<p>(概要)「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅲ」の準備として、臨床実習の対象として多い失語領域の言語聴覚療法について学修する。症例を通じて、検査から、評価、訓練立案、訓練といった一連の流れに沿って学修する。また、臨床現場で多く用いられている、非言語的検査・訓練、絵カードや音楽を用いた訓練についても学修する。基礎的な知識・技術の修得だけでなく、実際の言語聴覚療法場面を設定し、対象者および家族、またスタッフ等との接し方についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(86) 西田 香利/6回) 実際の臨床現場で行われている、失語症者に対する言語聴覚療法について学修する。他職種との連携や、対象者・家族等への対応の仕方等についても学修する。</p> <p>(3) 石川 裕治/9回) 失語症に関する評価結果から、具体的な訓練プログラムの立案について学生指導を行う。また、対象者との接し方等、実際の言語聴覚療法における基本的態度についても学修する。</p>	オムニバス方式
		言語聴覚療法技術実習Ⅳ (発声発語・嚥下障害)	<p>(概要)「言語聴覚療法臨床実習Ⅱ」の経験をもとに、「言語聴覚療法臨床実習Ⅲ」の準備として、臨床実習の対象として多く経験する、発声発語・嚥下領域の言語聴覚療法について学修する。臨床実習の対策として、事例を通して、検査の確認から、訓練プログラムの立案、訓練まで、一連の流れに沿って言語聴覚療法について体験的に学修する。基礎的な知識・技術の修得に加え、対象者および家族、またスタッフ等との接し方についても学修する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(3) 石川 裕治/8回) 発声発語機能に関する検査結果から、具体的な訓練プログラムの立案、訓練の実際について学修する。また、対象者との接し方等、実際の言語聴覚療法における基本的態度についても学修する。</p> <p>(64) 土居 奈央/7回) 嚥下機能に関する検査結果から、具体的な訓練プログラムの立案、訓練の実際について学修する。また、対象者との接し方等、実際の言語聴覚療法における基本的態度についても学修する。</p>	オムニバス方式
		言語聴覚療法臨床実習	言語聴覚療法臨床実習Ⅰ	言語聴覚療法について、より実践的に知識を習得するため、言語聴覚療法の提供の場である病院および施設において行う。医療専門職として基本となる病院や施設の仕組みを理解するとともに、各部門間の役割と言語聴覚士の業務について学修する。具体的には、病院や施設等における言語聴覚療法の実際に対象者の概要について学ぶとともに、併せて医療専門職としての基本的態度を身につけられるよう、指導者や関係スタッフ、対象者とのコミュニケーションを体験する。

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
職業専門科目	言語聴覚療法臨床実習Ⅱ	言語聴覚士としての基本的態度を身につけるとともに、言語聴覚療法の評価について、より実践的に知識と技術を習得するため、言語聴覚療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、指導者の指導と助言を得ながら、臨床場面において対象者の評価として、情報収集、インテーク面接、検査・テスト、評価、訓練プログラムの立案を体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告することを体験する。	
	言語聴覚療法臨床実習Ⅲ	言語聴覚士としての基本的態度を身につけるとともに、言語聴覚療法の評価から訓練・援助に至る一連の流れについて、より実践的に知識と技術を習得するため、言語聴覚療法の提供の場である病院および施設において行う。具体的には、指導者の指導と助言を得ながら、臨床場面における、情報収集、インテーク面接、検査・テスト、評価、訓練までを体験する。また、実施した内容を適切に記録・報告すること、他職種とのリハビリテーションのチームアプローチを体験する。	
展開科目	生涯スポーツ論	現代社会・生活構造の変化を踏まえ、生涯スポーツの理念と歴史、政策、現状および課題、ライフステージに応じた生涯スポーツの展開・実践に必要な実践的理論、生涯スポーツの多様性や今後の可能性について学ぶ。	
	スポーツ心理学	運動やスポーツにおける心と身体の間を学ぶことにより、運動技能の習得やパフォーマンスの向上との繋がりを理解する。健康の維持・増進という視点から、スポーツ心理学の活用と人の行動との関連性について学修する。	
	学校保健論	発育・発達期にある児童・生徒の健康は、その人の生涯の健全な生活・幸福の基本となる。そのため、学校教育のなかで、児童・生徒の心身の発育・発達を促すために、どんな健康教育や健康管理がおこなわれているかについて学修する。	
	産業保健論	産業保健の目的と意義、産業保健活動について概観するとともに、働く人々の労働と健康の調和をはかり、働く人々の心身ともに健康で充実した職業生活を支援できる産業保健活動について学修する。	
	企業論	企業は、経営資源を最適化して、活動を行っている。本授業では、企業とは何か、を押さえつつ、情報の本質も理解しながら、情報・通信のインフラストラクチャの発展を通じて、企業活動や職業との関わりについて学ぶ。	同時に授業を行う学生数：70人 講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。
	データ分析論	ICT (Information and Communication Technology) を基軸とした情報化社会において、コンピュータを用いたデータ分析は欠かせない分野である。こうしたデータ分析は、情報化の進展により、増々その重要性を増しており、多くの研究分野のみならず、ビジネスや行政においても幅広く応用されている。そこで、本授業では、企業経営・マネジメントにおける意思決定や問題解決に活用されているデータ分析について学ぶ。また、健康・保健分野に関する官庁統計データや調査報告等の分析・解釈を実際に行うことを通じて、実践的に活用できるよう学修する。	
経営組織論	人は企業組織において仕事を分担し、協働を行っている。その協働をうまく行わせるためには、管理が必要となる。そこで、本講義ではその管理の具体的方法について理解することを目的とする。管理の方法には「仕事をさせる」という強制的な管理方法と「仕事をする気にさせる」という配慮型の管理方法がある。その管理の具体的方法についても学修する。	同時に授業を行う学生数：70人 講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
展開科目	理学療法展開科目群	マーケティング論	マーケティングとはどのようなもので、なぜ企業活動に必要なのかを、実際の事例を取り上げながら、マーケティングの基本的な考え方と枠組みについて学ぶと同時に、環境の変化に対して応用できる知識について学ぶ。	同時に授業を行う学生数：70人 講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。
		会計学総論	財務会計の基礎として、企業会計の原理・原則（構造とメカニズム）について理解する。そして、財務諸表の仕組みについて、構成要素別に整理する。	
		経営管理論	我々の生きている産業社会においては、企業が重要な役割を果たしている。経済活動の中心的な担い手は企業であり、その活動と成果がわれわれの生活を豊かにしている。企業の内部で行われている様々な活動を有機的にとらえながら、社会のニーズにマッチした価値が創造される仕組みや組織の活動、その主体の人間の諸活動について学修する。	同時に授業を行う学生数：70人 講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。
		起業論	起業とは、社内起業（新規事業）、社外起業（ベンチャーなど）、社会的起業（NPO活動など）と多岐にわたるものであり、事業立案・戦略策定・運営と、マネジメント知識が必要である。本授業では、起業に関する基礎的事項を理解すると同時に、日常の諸課題を解決するために必要な応用力を身に付ける。	同時に授業を行う学生数：70人 講じる措置：教育補助者をつけ、学生の授業理解促進のための支援や助言を行う。
	作業療法展開科目群	土佐地域資源論	高知という地域に目を向けて、地域が持つ豊かな文化や産業等の地域資源を知り、地域が抱える諸問題の探求を行うための基盤となる知識について学修する。具体的には、高知の様々な文化や産業、近年盛んである観光と地域振興等の実際について学ぶ。	
		社会的企業論	一般就労でも福祉的就労でもない第三の雇用の場である社会的企業について学修する。具体的には、障害者を含めた多様な人々が働くことができる協働型システムである社会的企業の社会的な目的、社会的背景を知り、社会的企業の役割、位置付け、特色及び日本における実態について学ぶ。 (オムニバス方式／全15回) (39 中野 良治／8回) 障害者を含めた多様な人々が働くことができる協働型システムである社会的企業について、その社会的目的と社会的背景を知るとともに、社会の変化における就労の場の様々な課題解決に向けての社会的企業の役割等について学ぶ。 (40 田上 純一／7回) 地域における社会的企業の位置付けと特色及び就労の場である実際の企業の具体的な事業内容について知るとともに、地域住民の方々が障がいの有無に関わらず共に生きて、共に働くための事業の運営方法等について学ぶ。	オムニバス方式
		福祉工学基礎論	急速な高齢化が進むなか、高齢者や障害者の日常生活を工学面から支援する「福祉工学」が注目を集めている。これは、失われたり衰えたりした感覚や手足、脳の機能を、機械で補助・代行する工学分野である。人間の機能を助ける工学技術の基礎的な知識を学修するとともに、ロボット等の様々な機器を生活場面における介護や自立支援に活用する方法について学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要				
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
展開科目	作業療法展開科目群	地域福祉論	社会福祉サービスを必要とする個人・家族の自立を、地域社会の場において可能とするための、生活基盤形成に必要なサービスの開発や組織化活動について学修する。具体的には、在宅福祉サービス、環境改善サービス(物的・制度的施策を含む生活・居住条件の改善整備)などについて学ぶ。	
		精神障害福祉論	現在の精神障害者に対する支援の基本的考え方と、精神科リハビリテーションの概念、支援モデルを理解した上で、相談援助の過程と、対象者との援助関係について学修する。具体的には、精神障害者の生活実態やニーズを踏まえ、精神障害者の地域生活支援に必要な、相談支援、居住支援、就労支援、権利擁護のシステム形成について学ぶ。	
		障害者福祉論	障害者を取り巻く社会情勢は厳しく、人権と尊厳を守るための福祉的支援は、様々な生活課題を解決するために重要である。この科目では、障害者の生活実態と福祉ニーズ、障害者福祉に関する法律や制度、支援に関わる機関や専門職の役割、支援におけるネットワーク等、障害者の在宅生活支援の実際について学修する。	
		地域防災論	近年の度重なる地震や台風・豪雨等の災害は甚大な被害をもたらしており、高知では南海トラフ地震や大型台風の襲来に備える必要がある。人の命と生活を守るためには、これらの災害と防災の基礎を知ることが重要である。この科目では、地震や台風・豪雨等に伴う災害の特徴とその実際、災害への備え、災害時の人間の心理や災害時要援護者対応等について学修する。	
		更生保護制度論	犯罪をした者の社会復帰における自立更生を支援し、再犯を予防するための更生保護制度について学修する。具体的には、更生保護の意義や更生保護制度の概要、更生保護施設の役割、犯罪の実態と更生保護の実際、円滑な自立と社会復帰のための指導や援助、更生保護における関連機関との連携等について学ぶ。	
		特別支援教育論	障害のある幼児・児童・生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行う特別支援教育について学修する。	
		対人援助技術論	(概要)より良い援助者として成長するためには、指導する者と指導を受ける者との関係間におけるスーパービジョンによる教育方法が重要となる。また、保健・医療・福祉領域においてより質の高い援助を提供するためには、様々な他職種、専門職種間で、それぞれの持つ視点や知識、情報、また、専門技術などを相談・協議、あるいは指導を受けるといったコンサルテーションが重要となる。この科目では、対人援助職として資質の向上を目指し、必要な知識や技術について理解するとともに、そのプロセスについて学修する。 (オムニバス方式/全15回) (108 西内 章/8回) より良い援助者となるために必要となる、指導する者と指導を受ける者との関係間におけるスーパービジョンによる教育方法の知識や技術について、そのプロセスとともに学ぶ。 (109 西梅 孝治/7回) 様々な他職種、専門職種間で、それぞれの持つ視点や知識、情報、また、専門技術などを相談・協議、あるいは指導を受けるといったコンサルテーションの知識や技術について、そのプロセスとともに学ぶ。	オムニバス方式

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
展開科目 言語聴覚療法展開科目群	地域福祉活動論	地域福祉活動は、地域住民のほか、民生委員・児童委員、社会福祉施設・社会福祉法人などの社会福祉関係者、保健・医療・教育などの関係機関の参加、協力のもと、「誰もが安心して暮らせる福祉のまちづくり」の実現をめざして、行われるさまざまな活動を意味する。本講義ではこれらの活動について学修し、各領域のしくみや関連性について学修する。	
	マンガ概論	マンガは、視覚情報が多く、場面が容易にわかること、ストーリーがあること、日常場面に多く見られる口語表現を多く含むこと等がある。マンガは世界共通言語ともいわれている。本授業では、マンガが持つ特性といった基礎的な知識について学修し、また、日常生活において用いられている伝達ツールとしてのマンガを紹介し、マンガを用いた場合とそうでない具体例を紹介するなど、マンガの意思を伝達するツールとしての有効性について学修する。	
	マンガ基礎実習	マンガが、意思を伝達する有効なツールであることを説明し、コミュニケーション手段としてのマンガ制作を体験する。表現法の基礎的な手法を学び、ストーリー性を持つ場面をマンガで表現し、それらを用い学生同士でコミュニケーションを体験する。	
	活字デザイン論	活字は、文字などが紙に印刷されたもので、本や雑誌などの出版と新聞がその代表である。活字媒体は、人間の思考や世の中の出来事を広く伝達し、長く蓄積する媒体として用いられてきたが、日本では、1970年代に「活字ばなれ」が指摘され、子どもの読書量の減少が問題視されてきた。しかし、今日、活字を様々な形に変化させるデザイン文字が作られ、文字の新たな使用法が目目されている。本講義では、様々なデザイン文字が、広告やポスター等に用いられているかを紹介し、文字の新たな使用方法について学修する。	
	視覚デザイン概論	デザインは、新聞、雑誌、絵本など印刷物に始まり、CDジャケットや食料品のパッケージ、テレビコマーシャルにウェブサイト、または街中で見かけるサインボードに至るまで、身近すぎてその存在に気付かない程である。そのように今まで接してきながら意識して来なかったデザインを改めて眺めることにより、社会の中でのデザインの果たす役割、またはその成り立ち、文字や写真、絵などの形や大きさ、色などを組み合わせることによる表現法について学修する。	
	カラーコミュニケーション概論	色の果たす役割は、①心地よさ、②イメージ、③アピール、④区別、⑤見やすさ・見にくさ、⑥統一感、⑦象徴など、があるとされており、文字や記号、形、絵やマンガ、また、背景等様々な場面で使用され、多くの情報を提供している。本講義では、色に関する基礎的な知識について学んだ上で、色が、身近な生活の中でどのように意思を伝達するツールとして使用されているのか学び、実際に、色を用いることにより、他者にその意味が伝わるのかといった体験を行い、色が意思伝達の重要なツールであることの理解を深める。	
	視覚伝達デザイン論	視覚伝達デザインの意義、領域、機能等について学修する。構成と文字と色彩、写真やイラストなどの表現技術、様々なメディアと文化的背景、視覚に関する知識などピストグラムを中心とした視覚伝達デザイン全般について幅広く概説する。具体的事例を通して、社会との関連を考察しながら、視覚伝達デザイン全般にわたって理解を深める。	
	情報メディア学入門	身の回りにはインターネット上の映像、音楽、地図情報、文字情報、ニュース記事から広告、そしてレビュー情報などがあふれている。さらには、テレビ放送、ラジオ放送、印刷物としての新聞から本、雑誌、DVDなども常に身近にある。街には多くの看板から電子掲示板などが目につく。それらを広くメディアと呼ぶが、本講義では、それらメディアがどのようなコンテンツであるのか、そしてそれらのコンテンツがどのようにしてユーザーに届けられているのかを体系的に学修する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
展開科目	言語聴覚療法展開科目群		
	広告論	企業と消費者との接点は、購入前、購買時、使用时、使用后など多くの局面があり、企業は「ブランド・コンタクト」という視点からコミュニケーションを考え、情報提供を行っている。その理由は、単に良い製品を魅力的な価格で、どこでも容易に入手できるようにしても、その存在が消費者に認知されなければ購買には至らないからである。企業にとって必要なのはコミュニケーションすべきかどうかではなく、誰に、何を、どの程度伝えるのかというコミュニケーション活動の戦略的デザインである。 本講義では、コミュニケーション活動の中でも大きな比重を占める広告を取り上げ、企業のマーケティング・コミュニケーション活動への理解を深めることを目的とする。	
	企業広報活動論	スーパーマーケットや旅行会社等で実際に行われている宣伝活動について、その現状を知る。その中で、広告やチラシなどが、どのような目的で、どのような過程を経て制作されるのかについて知り、その効果や問題、今後の課題について学修する。	
	広告デザイン論	広告は、生産者が消費者に向けて、商品やサービスに関する情報を広く提示する情報伝達手段の一つである。商業広告がマス・コミュニケーションの手法を獲得し、さらに将来の需要を喚起する目的を持ち始めると、広告主の利益のみならず、消費者の利益のためにあるという広告の観念が進化してきた。本講義では、マーケティングの基礎的理解とその中の広告のしくみ、歴史的あるいは今日の広告媒体を含めて学修する。	
総合科目	応用理学療法学		
	理学療法地域支援実習	地域コミュニティは、人間性を回復して、自律型の地域社会をつくる基盤であり、地域包括ケアシステムにおいて、この地域コミュニティは重要な位置づけとなっている。高齢者や障害者・障害児が住み慣れた地域で望む生活ができるように援助するためには、地域社会の状況を知ることが基本である。様々な地域に出向いて住民との交流を行うとともに、支援サービスの実際について見学し、地域連携に繋がる基本的知識を学修する。	
	応用理学療法学演習	理学療法の対象となる身体障害・発達障害・老年期障害・地域などの領域について、疾患・障害の状態の理解から、評価・計画立案、実施の際の留意点に至るまで、一連の流れについて、基本的事項から事例検討までを学修する。	
	理学療法総合演習Ⅰ	将来理学療法士になる者として、高齢者・障害者の地域生活支援は必要不可欠な支援技術である。学修の総まとめとして、老年期地域健康増進活動における理学療法の立場からみた支援の実際について学修する。健康増進事業施設の見学、身体能力測定の見学などを通して、高齢者の生活不活発発病の背景や、チームアプローチによる解決手法を知り、理学療法士として必要であるアセスメント能力と、生活の場における課題解決の視点と技法について学修する。	共同
	理学療法総合演習Ⅱ	将来理学療法士になる者として、高齢者・障害者の地域生活支援は必要不可欠な支援技術である。学修の総まとめとして、地域包括ケアシステムにおける理学療法の立場からみた支援の実際について学修する。介護予防事業施設の見学、地域ケア会議の見学などを通して、高齢者の生活不活発発病の背景や、チームアプローチによる解決手法を知り、理学療法士として必要であるアセスメント能力と、生活の場における課題解決の視点と技法について学修する。	共同
	理学療法総合演習Ⅲ	将来理学療法士になる者として、障害児の成長に合わせた学習支援や生活支援は必要不可欠な支援技術である。学修の総まとめとして、療育の現場における理学療法の立場からみた支援の実際について学修する。児童発達支援事業施設の見学、放課後等デイサービスの見学や利用者との関わりを通じて、発達障害のある児童への支援の実際を知るとともに、理学療法士として必要であるアセスメント能力と、療育の場における課題解決の視点と技法について学修する。	共同

授 業 科 目 の 概 要					
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)					
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
総合 科目	応用 作業 療法 学	作業療法地域支援実習	地域コミュニティは、人間性を回復して、自律型の地域社会をつくる基盤であり、地域包括ケアシステムにおいて、この地域コミュニティは重要な位置づけとなっている。高齢者や障害者・障害児が住み慣れた地域で望む生活ができるように援助するためには、地域社会の状況を知ることが基本である。様々な地域に出向いて住民との交流を行うとともに、支援サービスの実際について見学し、地域連携に繋がる基本的知識を学修する。		
		応用作業療法学演習	作業療法の対象となる身体障害・精神障害・発達障害・老年期障害・地域などの領域について、疾患・障害の状態の理解から、評価・計画立案、実施の際の留意点に至るまで、一連の流れについて、基本的事項から事例検討までを学修する。		
		作業療法総合演習Ⅰ	将来作業療法士になる者として、コンピュータを用いた福祉機器の活用は、障害者の地域生活におけるコミュニケーションや社会参加に必要な不可欠な支援技術である。学修の総まとめとして、コンピュータを用いた福祉機器を活用した障害者の生活支援のあり方とその援助技法について、障害者自身の状態と介護者の状況や生活環境などを考慮した機器の選定や操作方法、スイッチの適合、機器の固定など環境調整について、事例を通して学ぶ。		
		作業療法総合演習Ⅱ	将来作業療法士になる者として、障害者の地域生活支援は必要不可欠な支援技術である。学修の総まとめとして、障害者総合支援法のサービスにおける作業療法の立場から見た支援の実際について学修する。通所や入所サービスなどの施設見学や利用者との関わりなどを通して、作業療法士として必要であるアセスメント能力と、障害者の日中の活動の場における課題解決の視点と技法を、事例を通して学ぶ。	共同	
		作業療法総合演習Ⅲ	将来作業療法士になる者として、高齢者の地域生活支援は必要不可欠な支援技術である。学修の総まとめとして、地域包括ケアシステムにおける作業療法の立場から見た支援の実際について学修する。通所施設・介護予防事業施設などの見学や利用者との関わりなどを通して、高齢者の生活不活発発病の背景や、チームアプローチによる解決手法を知り、作業療法士として必要であるアセスメント能力と、生活の場における課題解決の視点と技法を、事例を通して学ぶ。	共同	
	応用 言語 聴覚 学	言語聴覚療法地域支援実習	地域コミュニティは、人間性を回復して、自律型の地域社会をつくる基盤であり、地域包括ケアシステムにおいて、この地域コミュニティは重要な位置づけとなっている。高齢者や障害者・障害児が住み慣れた地域で望む生活ができるように援助するためには、地域社会の状況を知ることが基本である。様々な地域に出向いて住民との交流を行うとともに、支援サービスの実際について見学し、地域連携に繋がる基本的知識を学修する。		
		応用言語聴覚学演習	将来言語聴覚士になる者として、必要な知識について総合的に学修する。医学分野、言語聴覚療法専門分野について、用語やその意味を確かなものとし、言語聴覚療法実践においてどのような場面で必要となるのかなどについて、教員の指導のもと、グループ形式をとり学修する。単なるシェア学習に留まらず、活発な意見交換や効率の向上を目指す。		
		言語聴覚療法総合演習Ⅰ	将来言語聴覚士になる者として、発達障害児に対する学習・就労支援は言語聴覚療法の必要不可欠な援助内容である。言語聴覚学の集大成として、発達障害、言語聴覚療法、聴覚障害などの援助における言語聴覚士の役割について学修する。キャリア教育の一環として、実際に地域の小児領域の施設見学や障害児との関わりを通して、言語聴覚士に必要な知識と技術について事例を通して学修する。		

授 業 科 目 の 概 要			
(リハビリテーション学部リハビリテーション学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合科目	応用言語聴覚学		
	言語聴覚療法総合演習Ⅱ	将来言語聴覚士になる者として、失語症を含む高次脳機能障害、構音障害、音声障害、摂食・嚥下障害のある方々に対する社会復帰に向けた支援は言語聴覚療法の必要不可欠な援助内容である。言語聴覚学の集大成として、コミュニケーション障害、食べる機能の障害などの援助における言語聴覚士の役割について学修する。キャリア教育の一環として、実際に地域の医療施設の見学や利用者との関わりを通して、言語聴覚士に必要な知識と技術について事例を通して学修する。	
	言語聴覚療法総合演習Ⅲ	将来言語聴覚士になる者として、高齢者が抱える認知症を中心とした障害のある方々に対し、家庭・社会復帰に向けた支援は言語聴覚療法の必要不可欠な援助内容である。言語聴覚学の集大成として、高齢者に多い、言語聴覚障害、認知症、摂食・嚥下障害への援助における言語聴覚士の役割について学修する。キャリア教育の一環として、実際に地域の高齢者施設の見学や利用者との関わりを通して、言語聴覚士に必要な知識と技術について事例を通して学修する。	

学校法人高知学園 設置認可等に関わる組織の移行表

大学の新設

平成30年度

入学
定員

編入学
定員

収容
定員

平成31年度

入学
定員

編入学
定員

収容
定員

変更の理由

高知学園短期大学			
生活科学学科	80	—	160
幼児保育学科	80	—	160
医療衛生学科	80	—	240
看護学科	60	—	180
計	300	—	740
高知リハビリテーション学院			
理学療法学科	70	—	280
作業療法学科	40	—	160
言語療法学科	40	—	160
計	150	—	600

高知リハビリテーション 専門職大学				
リハビリテーション学部				
リハビリテーション学科	150	—	600	
計	150	—	600	
高知学園短期大学				
生活科学学科	80	—	160	
幼児保育学科	80	—	160	
医療衛生学科	80	—	240	
看護学科	60	—	180	
計	300	—	740	
高知リハビリテーション学院				
	0	—	0	平成31年4月 学生募集停止
	0	—	0	平成31年4月 学生募集停止
	0	—	0	平成31年4月 学生募集停止
計	0	—	0	